

ふるさと福井の 先人100人



福井県教育委員会

「ふるさと福井の先人100人」を手にした中学生、高校生の皆さんへ

福井県は、古代から現代まで、政治や文化など幅広い分野において、自らの力で時代を切り拓き、輝かしい業績を残した人物を多く輩出しています。

福井県教育委員会では、福井県や日本を創ってきた代表的な人物を選定し、先人の生き方や考え方を学ぶ教材として「ふるさと福井の先人100人」を作成しました。

この教材では、ふるさと福井の先人たちの業績をはじめ、光り輝いていた時期や子ども・青年時代のエピソード、先人ゆかりの地を紹介しており、先人を身近に感じられる読みものとなっています。先人に関連するさまざまな図書も紹介していますので、ふるさと福井についての理解を深めるのに役立ててください。

皆さんが、ふるさと福井の先人について学ぶことにより、福井県および日本の歴史や文化を理解し、国際社会で自分の未来を切り拓く力を身につけるとともに、将来、ふるさと福井の魅力を日本や世界に発信できる人材として活躍してくれることを願っています。

令和2年3月

福井県教育委員会

目次

中世

お市の方	38
柴田勝家	36
明智光秀	34
朝倉義景	32
逸見昌経	30
真柄十郎左衛門	28
朝倉孝景	26
武田信賢	24
蓮如	22
畑時能	20
新田義貞	18
瓜生保	16
道元	14
藤原利仁	12
紫式部	10
泰澄	8
継体大王	6

古代

近世

中川淳庵	82
夢楽洞万司	84
伴信友	86
東條義門	88
間部詮勝	90
中根雪江	92
内山良休	94
吉田東篁	96
横井小楠	98
笠原白翁	100
三国幽眠	102
寺川庄兵衛	104
土井利忠	106
橘曙覧	108
酒井忠義	110
梅田雲浜	112
長谷部恕連	116
松井耕雪	118
村田氏寿	120

近現代

佐々木忠次郎	162
大和田莊七	164
釈宗演	166
岡倉天心	168
山川登美子	170
佐久間勉	174
大森房吉	176
林歌子	178
島田墨仙	180
市川新松	182
岡田啓介	184
増永五左衛門	186
藤野巖九郎	188
禿すみ	190
橋本進吉	192
秋山徳蔵	194
雨田光平	196
平泉澄	198
奥むめお	200

近世

金森長近	40
本多重次	42
大谷吉繼	44
京極高次	46
お初(常高院)	48
本多富正	50
結城秀康	52
佐々木小次郎	54
橋本長兵衛	56
岩佐又兵衛	60
住友政友	62
酒井忠勝	64
砂村新左衛門	66
行方久兵衛	68
松木庄左衛門	70
近松門左衛門	72
高橋梨一	74
豊田屋哥川	76
上島重兵衛	78
杉田玄白	80

近現代

伊藤慎蔵	122
松平春嶽	124
由利公正	126
佐々木長淳	128
橋本左内	130
関義臣	132
木戸松子	134
W・E・グリフィス	136
日下部太郎	138
細井順子	140
G・A・エッセル	142
渡辺洪基	144
吉田健三	146
石塚左玄	148
杉田定一	150
矢代操	152
松旭斎天一	154
丸木利陽	156
和田維四郎	158
平瀬作五郎	160

近現代

花菱アチャコ	202
三好達治	204
杉原千畝	206
中野重治	208
大塚末子	210
桑原武夫	212
高見順	214
榊原仟	216
白川静	218
多田裕計	220
水上勉	222
竹内均	224
水野九右衛門	226
石墨慶一郎	228
南部陽一郎	230
加古里子	232
若泉敬	234

ふるさとと福井の 先人一〇〇人

ふるさとの先人たちは、どんな時代に生き、
何を見て、何を感じ、何を考え、
そして、どんな生き方をしたのだろうか。

- この本では、年代の古い順に福井県にゆかりのある先人を紹介しています。
- 年代区分については、古代から現代までの区分と、江戸時代といった時代区分を並記していますが、区分にまたがっている生没年の人物や生没年のはっきりしない人物も含めて、主に活躍した時代の区分名としています。
- この本を手がかりにして、それぞれの先人に関する著書をひも解くことができるように、様々な著書の一部を引用して紹介しています（各ページの茶色文字の部分）。

継体大王



450年?～531年

越国(高向)出身、天皇家の祖。
聖徳太子はひ孫にあたる。
越国では治水や干拓、採石、漆塗りなど
古代のインフラ整備と産業発展に貢献。

どんな子だった?



母親のふるさと越国で成長した天皇

継体大王(即位前の名は男大迹王)は、近江国高島(滋賀県高島市)を治める王族の彦主人王を父に、越国の三国(坂井市)を治める王族の娘振媛を母として、近江国高島で誕生したとされます。彦主人王が亡くなると振媛は故郷に戻り、高向(坂井市丸岡町高椋)で男大迹王を育てます。また、現在の越前市味真野周辺にもゆかりの地が多く、即位

までの50年余りを越国で過ごしたとされます。かつての福井県北部の平地は、川の氾濫による沼や湿地の多い所で、それを見て育った男大迹王は、実りの豊かな地となることを思い、治水と干拓に力を注ぎました。福井県内には、そんな男大迹王の様々な伝説が残っています。

episode
1

なぜ越国の人物が天皇に?

継体大王(男大迹王)は、現在の皇統に続く人物とされます。しかし、日本古来の歴史書には継体大王に関する記述が少なく、今も多く謎を秘めている天皇でもあります。なぜ地方の越国から大和政権の最高位である天皇の位についたのか、そして、即位してから20年もの間、政権の本拠地である大和に入らなかったのはなぜか。そうした謎は、多くの古代史ファンにとりこにする由縁にもなっています。

即位に至る経緯について、『日本書紀』の記述を現代文で要約すると、次のようになります。

男大迹王が57歳の時、武烈天皇(第25代天皇)が亡くなられ、

子どもがいなかったため、後嗣が絶えてしまうことになりました。そこで大連の大伴金村は、仲哀天皇の五世の孫、倭彦王を天皇に迎えようと考え、丹波国の桑田郡に兵士を遣わしました。ところが倭彦王は兵がくるのを見ると、恐れをなして逃げ出し、行方が分からなくなっていました。

次に金村は、成神天皇の5世の子孫、男大迹王を迎えようと考えます。「男大迹王は情け深く親孝行で、天皇の位を受け継ぐには相応しい方である。なんとか即位していただき、皇統を継いでもらいたい」と大連や大臣らと相談し、鳳駕(天皇の乗り物)を備えて、越国の高向へと迎えにやってきました。



(県内) 福井市 坂井市 南越前町
鯖江市 若狭町 越前市
永平寺町

(県外) 大阪府枚方市 京都府京田辺市
奈良県桜井市

天皇の恋物語 〜謡曲「花筐」

507年、継体天皇は樟葉宮（大阪府枚方市と推定）で第26代の天皇として即位し、5年後に筒城宮（京都府京田辺市と推定）に移っています。そして、さらに7年後、弟国宮（京都

謡曲「花筐」は世阿弥の作とされる能の一曲で、男大迹王の恋の物語がテーマになっています。そのあらすじは次のような内容です。

治水や干拓の大工事によって、作物の豊かに実る国づくりをしていた男大迹王が、味真野（越前市味真野地区）に住んでいた頃のこと、男大迹王には、愛する女性がいました。名を照日といい、ふたりは仲睦まじく味真野の宮で暮らしていました。

ある日、急きよ天皇として大和に向かうことになり、宮を離れた照日に別れを告げられなかつた男大迹王は、手紙と花筐（花を摘んで入れるかご）を形見として渡すよう、家来に託して旅立ちました。手紙と花筐を受け取った照日は、悲しみの涙に暮れ、ついに侍女を連れて、いくつもの峠を越え、会えるあてもない旅に出ました。

ようやく玉穂の宮近くにたどり着いた照日らは、輿に乗った高貴な人物と家来たちの一行に出会います。すると家来が照日たちに「薄汚い女、立ち去れ」と、侍女の持つ花筐を地面へ打ち落とし、追い払おうとしました。照日は狂乱したように、

「それは男大迹王から頂いた花筐であるぞ」

と怒りを露にしました。実はその高貴な人物こそ、即位して天皇となった男大迹王だったので。家来が一部始終を告げると、男大迹王は女を輿の近くに連れてこさせ、舞を舞わせます。美

府長岡京市と推定）に入り、その8年後、ようやく大和の磐余玉穂宮（奈良県桜井市と推定）に宮を移しています。

しくも激しく舞う照日の姿を見た男大迹王は、それが照日だと気づきます。

「照日、お前は狂女となるほど慕ってくれるか。もう狂女となることはない。これからは玉穂の宮でともに暮らそう」

そう言って、男大迹王は照日を輿に乗せ、二人仲良く宮殿へと戻っていきました。

男大迹王と照日の恋物語「花筐」は、こうしたハッピーエンドで話を終えています。実は、継体天皇となった男大迹王には、天皇家の血筋をもつ皇后の他に、大和の近隣諸国と手を結ぶために迎えた妃が9人もいました。宮殿で暮らしはじめた照日は、はたして幸せだったのでしょうか…。

※継体大王：「天皇」号は7世紀後半に正式に定められたと考えられ、「継体」という漢風の名も後につけられたもの。
※世阿弥：室町時代の能役者・能作者。

check
for

継体大王



『古事記』（次田真幸全訳注）講談社
『日本書紀』（宇治谷孟全訳）講談社
『現代語訳 日本書紀』（福永武彦訳）河出書房新社
黒岩重吾『北風に起つ 継体戦争と蘇我稲目』中央公論社
水谷千秋『謎の大王継体天皇』文藝春秋
門脇禎二他『継体大王と振媛 一越国の物語一』大巧社
『大王がゆく 継体天皇即位千五百年』福井新聞社
森浩一・門脇禎二編『継体王朝 一日本古代史の謎に挑む一』大巧社
『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館

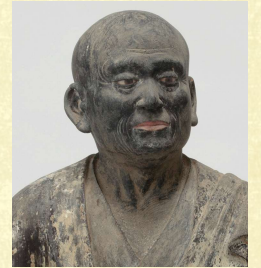


継体以降は、その皇子の安閑（27代）、宣化（28代）、欽明（29代）が天皇になり、欽明の血筋が後の皇統へと繋がります。有名な聖徳太子は欽明の孫、すなわち継体の血筋を引くひ孫になります。

泰澄

たい

ちよう



682年?~767年?

鎮護国家の法師となった越前の僧。
越知山で修行し、後に白山を開山。
修行により不思議な靈力を得て
白山信仰の祖となる。

どんな子だった?



泥と土で仏像を造って遊ぶ不思議な子ども

白山信仰の開祖とされる泰澄の生涯は、多くの謎に包まれています。が、いくつか残る伝記の中で最古のものに『泰澄和尚伝記』があります。それによると、泰澄は、麻生津（福井市三十八社町）の三神安角と猪野（勝山市猪野）の伊野氏の女性の子として生まれ、幼い頃は泥をこねて仏像を作って遊ぶという不思議な子でした。また、麻生津を訪れた高僧の

道照（道昭）が、神童であることを見抜きます。そして、14歳の時に夢のお告げを受け、それからというもの越知山（丹生郡越前町）にある窟に通い、修行をするようになりました。泰澄は修行で不思議な靈力を身につけ、やがて天皇から鎮護国家（信仰で国を守る）の法師に任じられました。

episode
1

『泰澄和尚伝記』に記された泰澄

泰澄が活躍した頃の日本は、外国から伝わった仏教が国を守り災いを鎮めるといふ思想をもとに、仏教が「鎮護国家」の宗教として大きな役割を担っていた時代でした。そうしたことを背景に、奈良時代が始まる少し前の大宝2（702）年、20歳前後の若さで国の重要な役割を任命された泰澄は、彗星のごとく現れたカリスマ的な存在であったのかもしれない。大宝2（702）年以降の動きについて、『福井県史』にある『泰澄和尚伝記』の現代文の要旨をもとに追ってみましょう。

この年、能登島より小沙弥が訪れ、やがて泰澄の身の回りの世話をするようになり、臥行者とよばれた。

臥行者は北海の行船から米を徴収し和尚に供していたが、和銅五年（七一二）中央の政府に納める米を運搬して出羽よりやってきた船の船頭神部浄定はこれを断った。臥行者が怒ると、船の米は飛んで越知峰に集ったため、仏徳の不思議を見て浄定は和尚に謝った。そして米を返してもらい、これを中央に届けたのち和尚の弟子となって側に侍した。

和尚は靈龜二年（七二六）に貴女（白山神）の夢告を受け、養老元年（七二七）四月一日その母のゆかりの地である白山の麓の大野隈苔川東伊野原に來宿した。

この東の林泉に貴女が現われ、自分は伊弉諾尊（伊弉冊尊の誤記か）で、妙理大権現と号すと語った。

（県内）福井市 越前町 勝山市



各地に残る泰澄ゆかりの場所

さらに和尚が白山天嶺の禪定(霊山の頂上)に登ると、緑碧池の側で最初九頭竜王が、次に白山神の本地仏である十一面観音が現われた。

また左孤峰で聖観音の現身である小白山別山大行事、右孤峰で阿弥陀の現身の大己貴を感じ、和尚はこの峰に居した。

のち養老六年には浄定行者とともに都に赴いて元正天皇の病の治療にあたった。その効あつて和尚は護持僧として禅師の位を授けられ、諱を神融禅師と号した。

また神龜二年(七二五)七月には白山妙理大権現に参詣した行基と出会い、行基の質問に答えて種々の現瑞などを語り、行基は極楽での再会を誓った。

ついで天平八年(七三六)に都に出て玄叻に会い、十一面経

白山で神と仏の関係を感得し、白山信仰の祖となり、優れた霊力で人々を救った泰澄。そうした泰澄にゆかりのある場所は、白山をとりまく福井県、石川県、岐阜県に多く、とくに福井県内では、主だった山の多くが泰澄や白山信仰ゆかりの伝承を持ち、また、泰澄を開基とする寺が各地にあります。

福井市にある泰澄寺(三十八社町)は泰澄生誕の地と伝わります。また、幼い頃そこから通った越知山にある大谷寺(丹生郡越前町大谷寺)は、泰澄の晩年にもゆかりが深く、白山信仰や越前の天台宗の拠点として栄えた寺です。泰澄の墓と伝わる石造九重塔があり、重要文化財に指定されています。そして、白山への入口の拠点として栄えたのが、かつて平泉寺と呼ばれた平泉寺白山神社です。貴女が現れた林泉のほとりに泰澄が庵をつくり、仏像を祀った場所に創建されました。

を授けられた。

翌九年には当時大流行していた天然痘の鎮撫のため、勅を受けて十一面法を修した。その功によって大和尚の位を賜わり、また諱を泰澄と号した。

その後、天平宝字二年(七五八)からは越知峰の大谷仙窟に暫居し、ここを入定の地と定めたが、この間神護景雲元年(七六七)には一万基の三重木塔を勸進造立し、勅使吉備真備に付けて奉った。

同年三月十八日和尚は予言どおり結跏趺坐し、大日の定印を結んで八六歳で遷化した。その遺骨は石の柩に入れ、大師房に葬った。

一方、石川県側の白山の入口には白山比咩神社、岐阜県側には長滝白山神社(白山中宮長滝寺)があり、越前の平泉寺と合わせて白山三馬場と呼ばれ、白山信仰の一大拠点となっていました。白山信仰は、泰澄から1300年にわたり広く信仰され、今も全国各地に白山神社が分布しています。

※神童：才知のきわめてすぐれている子ども。

※本地仏：神々は仏や菩薩がいろいろな姿で現れた化身であるとし、その根本である仏や菩薩を本地仏という。

※感得：感じ悟ること。

※護持僧：天皇のために祈禱を行う僧。

※諱：身分の高い人の実名。生前の徳行によって死後に贈る称号。

※現瑞：現れた兆し。

check for 泰澄



平泉寺『泰澄和尚伝記』

司馬遼太郎『街道をゆく 18・越前の諸道』朝日新聞出版

本郷真紹『白山信仰の源流 泰澄の生涯と古代仏教』法蔵館

笠松雅弘『白山信仰の源流』『福楽』49号・51号・53号 エクシード

『福井県史』通史編Ⅰ原始・古代 福井県

下出積與編『民衆宗教史叢書 18 白山信仰』雄山閣出版

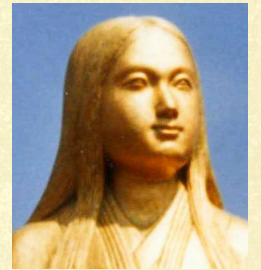
『これき人物シリーズ 4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



泰澄を開基とする平泉寺は、中世に絶頂期を迎え、48社36堂6千坊、僧兵8千人を数える宗教都市として栄えました。その後、1574年、一向一揆により焼失。現在、その発掘が行われ、巨大な宗教都市の解明が進められています。

紫式部



970年?~1010年?

日本を代表する古典文学、源氏物語の作者。
父親の藤原為時が越前守になると
父とともに越前の国府(越前市)で過ごし
後に一条天皇の中宮彰子に仕える。

どんな子だった?



学者の家系という環境の中で、幼い頃から才能を発揮

紫式部の誕生した年は諸説あり、没年もわかっていません。父は学者で歌人でもある藤原為時。母は藤原為信という学者の娘で、紫式部が幼い頃に亡くなりました。両親ともに学者の家系に育った紫式部は、幼い頃から漢文を読んで暗唱するほどの才能を発揮していました。

紫式部の「紫」は、源氏物語の主人公の一人「紫の上」に由来すると考えられ、「式部」は、式部省の役人であった父親の官職名です。当時、朝廷や貴族に仕える女性の名には、父親や兄弟の職名が使われていました。姓が藤原であることから「藤式部」と呼ばれていた頃もありましたが、実名は定かではありません。

episode
1

父親とともに都から越前へ

『源氏物語』や『紫式部日記』、また、百人一首の中の歌でも知られる紫式部は、生涯で一度だけ、都を離れて暮らしたことがあります。長徳2(996)年、父親が越前守に任じられると、父親とともに越前の国府(越前市)に移り住み、娘時代の1年余り過ごしました。少女時代から晩年までの歌を自選した『紫式部集』には、越前への旅と、越前で過ごす日々の中で詠んだ歌も収められています。

越前へ向かう旅の途中、琵琶湖のほとりの三尾が崎(高島市安曇川町)では、湖で網を引く漁師の姿を見るにつけても都が恋しいという心情を歌に詠んでいます。『図説福井県史』では、『紫式部集』の中から越前にまつわる箇所をわかりやすく紹介

しています。

塩津山を通る道は、古くから近江と越前を結ぶ道でしたが、険しく難儀な道でした。そこを「賤の男のあやしきさま」をした者たちに輿を担がれ進むにつれ、心細さはつのったことでしょうか。(中略)

越前は雪深い国です。冬を迎えしだいに寒さが厳しくなると、式部の歌にも雪が多く詠み込まれるようになります。しかし目の前に見える日野岳(日野山)の雪を見ても、都の西の小塩山の雪を思い出します。慣れない雪国の生活は、式部の心を暗くしていきます。



(県内) 越前市 敦賀市 南越前町
(県外) 京都府 滋賀県

『源氏物語』が宮中で大人気に

都に戻った紫式部は、親子ほど歳の離れた藤原^{のぶたか}宣孝と結婚し、女の子を産みますが、ほどなく夫は病死してしまいます。その後、一条天皇の中宮である彰子の女房（朝廷に仕える女官）になり、歌などを教える教師役も務めます。

『源氏物語』を書き始めた時期は定かではありませんが、彰子のもとへ天皇が足しげく通うようにするために、物語を作ったとも言われます。当時、歌や物語は、異性の心をひきつける作戦の一つだったのです。やがて『源氏物語』は、天皇だけでなく宮中で大人気となっていきます。

物語は全54帖（巻）、400字詰め原稿用紙に換算すると2500枚近くにのぼる長編小説。恋愛や親子の情、政治などが織りなす世界に、500人以上の人物が登場し、70年間にも及ぶストーリーが展開します。いつの世にも普遍的なテーマをもつ『源氏物語』は、今も多くの人に読まれ、世界屈指の傑作として評価されています。

降り積みていとむつかしき雪を掻き捨てて
山のやうにしなしたるに人々のぼりてなほ
これ出でて見たまへといへば、
ふるさとに帰る山路のそれならば

心やゆくとゆきも見てまし

「帰る山路」は今庄町の鹿^{かひる}と「帰る」を懸けたもので、早く帰りたいという気持ち語っています。このように彼女にとつて越前は雪深い鄙^びの国で心晴れず、帰京したい心でいっぱい

だったようです。

そして翌年の晩秋が初冬のころ、式部は父と別れて、一年半いた越前にひとり別れを告げたのでした。（中略）鹿^{かひる}山・木ノ芽峠を越えての帰路、伊吹山の雪を見て、「名に高き越の白山ゆきなれて伊吹の岳をなにとこそ見ね」と詠みました。思ひ出す白山の雪は、もう彼女の心を暗くするようなものではなくなっていたのです。

《図説福井県史》原始・古代17「紫式部の見た越前」より

■『源氏物語』に登場する武生の記述

●武生の国府に移ろひたまふとも、忍びては参り来なむを

《源氏物語》第51帖「浮舟」より

（母と浮舟の別れに際して、母が「浮舟が都から遠い武生の国府に移ったとしても、忍んで行きますから」と浮舟を慰める言葉）

●「たけふ、ちちりちちり、たりたんな」など、搔^かき返し

はやりかに弾きたる、言葉ども、わりなく古めきたり

《源氏物語》第53帖「手習」より

（浮舟を救った横川僧都（よかわのそうず）の母が「たけふ、ちちりちちり」と古い歌詞を口ずさみ、琴を軽快に弾いている、その言葉などは、やたらと古めかしかった）

※鄙^び：田舎。ひなびたところ。

check for 紫式部



- 『21世紀版少年少女古典文学館5 源氏物語』（瀬戸内寂聴訳）講談社
- 『紫式部 はなやかな源氏絵巻』（学研まんが人物日本史 平安時代）学研
- 『紫式部 源氏物語を書いた女流作家』（学習漫画 日本の伝記）集英社
- 『伝記シリーズ 千年前から人気作家！清少納言と紫式部』集英社
- 『図説福井県史』福井県
- 『福井県史』通史編Ⅰ原始・古代 福井県
- 『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



『紫式部集』には夫の宣孝と交わした歌もあり、歌で夫婦喧嘩のようなものもしています。しゃれた懸詞で夫に紫式部が文句を言い、夫が何とかなだめようと歌で返すそのやりとりからは、頭の回転が早く可愛い新妻の紫式部像が見えてきます。

藤原利仁

生没年不詳

利仁将軍とも呼ばれ、

北陸の武士団の祖とされる伝説のヒーロー。

『今昔物語集』の説話をもとに

芥川龍之介が敦賀を舞台にした『芋粥』を執筆。

どんな子だった?



平安中期以降、勢力を持ち始めた武士の象徴的な人物

利仁の父親は藤原時長という武士で、祖父は越前守にも任じられた藤原高房。母親は越前の坂井（坂井市坂井町）を本拠とする豪族の娘とされます。

子ども時代も含めて、わからないことが非常に多い人物ですが、南北朝時代に成立した諸家の系図『尊卑分脉』では、東国

の国司を歴任し、延喜15（915）年、軍事の最高司令官である鎮守府将軍になったとされます。そのことから利仁将軍と呼ばれ、平安時代きつての英雄とされました。また『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』では、敦賀の豪族の娘婿になり、大きな権力を有していたとされます。

episode
1

北陸の武士の祖先とされる利仁

利仁は伝説の域を脱することのできない人物ですが、その名が登場する物語の一つに、源氏と平氏の戦いを描いた軍記物語『源平盛衰記』があります。それによると、利仁は、中世の越前や加賀、越中で勢力を持つ諸武士団の先祖として語られています。

先祖利仁将軍、三人ノ男ヲ生。嫡男在ニ越前、斎藤ト云。二男在ニ加賀、富樫ト云。三男在ニ越中、井口ト云。彼等子孫繁昌シテ、國中互ニ相親シム。サレバ三箇国ノ棟人ノ者共、内戚外戚ニ付テ親類一門ナラザル者ナシ。

『源平盛衰記(五)』より

（意訳）先祖である利仁将軍は三人の男子をもうけた。長男は越

前の斎藤氏、次男は加賀の富樫氏、三男は越中の井口氏という。それらの子孫は増えて広がり交流を持った。三カ国（北陸一円）に広がった子孫たちは皆、親戚関係になり、親戚でないものはないようだ。

また、『尊卑分脉』には、利仁の人物像についての面白い記述が見られます。現代で言うならスーパーマンといったところでしょうか、超人的な能力を持っていたという表現で、ヒーローとしての存在感が強調されています。



(県内) 敦賀市
(県外) 京都府

『芋粥』の説話にみる利仁

作家、芥川龍之介の小説『芋粥』の題材になった話が、平安時代末期の説話集『今昔物語集』にあります。主人公は、利仁ともう一人、五位という位をもつ男。利仁の館のある敦賀に二人がやってくるところから物語は始まります。

『今昔物語集』26巻17話のあらすじ

今は昔、利仁將軍という人があった。敦賀に住んでいた藤原利仁が若かった頃、閑白に仕えた人物の中に、五位という官位で呼ばれる男がいました。

ある正月の宴会の後で、「芋粥を飽きるほど食べてみたい」と五位がもらしたのを聞いた利仁は、4、5日後に、京の東山で湯を沸かしてあるので、風呂に入ろうと五位を誘い、東山よりずっと遠い敦賀まで連れていきます。

その道中、三津の浜というところで、一行の前に一匹の狐が走り出てきます。利仁は狐を捕まえて、その狐に、敦賀の館の者に客人を連れていくので、高島（現在の滋賀県高島市）まで鞍をつけた馬を2頭用意して迎えにくるよう、敦賀の館に伝えよと命令します。翌日、利仁らが進んでいくと、狐に命令したとおり、本当に敦賀の館から家来が迎えにきました。家来が言うには、昨夜、利仁の奥方の胸が急に痛み出し、どうしたことかと思っていたら、奥方は自分を狐だと言い、主の命令を伝えただので、そのとおりにしてやってきたのだと、この次第を話しました。

（意訳）海上を飛ぶ様子は羽があるかのようだ。きっと神が人に化けているのか。

敦賀の館に着くと、暖かい着物、菓子や食べ物が出され、また、夜は上等な布団が用意され、五位は、たいそう手厚くもてなされます。そして、翌朝、庭に筵を敷く音が聞こえたので何なのだろうかと見てみると、下男たちが次々と長芋を持ってきて、筵の上に置いていきます。そのうち、芋の山は屋根の高さまで積み上げられ、大きな釜が5つ、6つも運ばれてきます。大量の芋粥を作りはじめのを見た五位は、圧倒されて食欲をなくし、結局、一杯も食べきれないうちに腹一杯になり、周囲の笑いを呼び、残った芋粥は下男たちや狐にも振る舞われます。

『今昔物語集』では、利仁がそれだけの力を持っていたことを、地方の敦賀で都の下級役人に見つけたことが、テーマの一つになっています。

敦賀は、古くから日本海を隔てた対岸諸国と交流があり、平安時代後期には、唐人（中国の商人など）が居住していた地でした。敦賀の豪族であった利仁の妻の家は、貿易によって富を蓄えていた可能性も考えられます。『今昔物語集』の記述からは、多くの使用人を持ち、近辺の農民を支配していたことや、五位に立派なお土産を持たせたことなど、たいへん裕福な豪族であったことがわかります。

※筵：藁や藁草、竹などで編んだ敷物の総称。

check
for

藤原 利仁



池上洵一編『今昔物語集』岩波書店
『今昔物語集』角川書店
『福井県史』通史編Ⅰ原始・古代 福井県
『図説福井県史』福井県
芥川龍之介『羅生門・鼻・芋粥』角川書店



利仁の館のあった場所は、現在の敦賀市御名であったという伝承があります。御名は現在の敦賀市中心市街地の南にある高台で、川の氾濫などの影響を受けにくく、また敦賀湾まで一望できる位置にあります。

道元 どうげん



1200年～1253年

仏の道を求め、自ら比叡山に入り、
宋（中国）で禅の正法を学んで帰国。
越前に永平寺を開き、
日本の曹洞宗の開祖となる。

どんな子だった？



世の無常を感じ、名門貴族の家柄を捨てて仏の道へ

道元の父親は久我通親、もしくはその息子ではないかと考えられています。通親は土御門上皇の母方の祖父であり、源頼朝から怖れられるほどの政界の実力者でした。

道元が3歳の時に通親が亡くなり、また、8歳の時に母も亡くなると、伯父にあたる元摂政内大臣が、道元を官職に就かせるため、

養子に迎えて元服させようとします。しかし、幼くして両親を亡くした道元は、世の無常を感じ、貴族として官僚になるよりも、出家して僧になることを望みました。そして、13歳の春、比叡山の麓に住む叔父の良顕（良観）法師を訪ね、翌年には、比叡山で僧侶となるための得度の儀式を受けました。

episode
1

仏教の本質を問い続け、学び続けて見つけた禅の教義

道元が僧となった比叡山（京都市・滋賀県大津市）は、平安

時代の僧、最澄が開いた天台宗の本山です。道元はそこで天台宗の教義を学び始めます。しかし、学ばば学ぶほどに、道元の胸の中に、大きな疑問が生じてくるのでした。天台宗には「本来法性、天然自性身」という考え方があります。それは「すべての人には本来、仏としての性質が備わっており、人は本来、仏である」というもので、道元は、そこに疑問を感じたのです。もともと仏であるならば、なぜわざわざ修行する必要があるのか。この基本的な問いに、答えを与えてくれる人はいませんでした。

15歳になった道元は、入山からわずか2年ほどで比叡山を出

て、園城寺（滋賀県大津市にある現在の三井寺）の座主、公胤を訪ねて同じことを問います。すると公胤は禅宗の存在を道元に教え、建仁寺（京都市）を訪ねるよう告げます。

建仁寺で道元は、栄西が伝えた臨済宗の禅を知り、栄西の弟子の明全から禅を学びます。そして、24歳になると、明全とともに宋（中国）へ渡り、天童山景德寺に入り、如浄禅師のもとで4年間、禅をさらに追求して帰国。日本へ戻ってから、坐禅の心がまえや作法などをまとめた『普勸坐禅儀』や、坐禅によつて到達する悟りを説く『正法眼蔵』の最初の巻『弁道話』を著します。

天福元（1233）年、道元は京都の深草に興聖寺を開き、



（県内）永平寺町 南越前町
（県外）京都府 神奈川県鎌倉市
滋賀県大津市

本格的な座禅修行の場をつくりました。その座禅堂で修行をする弟子は次第に増え、道元の名声が高まると、比叡山から弾圧をうけることもありました。そして44歳の時、越前の地頭であつた波多野義重の招きで、弟子たちとともに、越前志比庄(永平寺町上志比)の山中にある吉峰寺に移ります。この寺で道元は『正法眼蔵』を書き、そして、寛元2(1244)年、大仏寺

ありのままの姿が仏法であり、日々の修行こそが悟り

を建立。これが今に続く日本の曹洞宗大本山永平寺の始まりとなりました。

大仏寺では、修行道場としての厳しい規律をつくり、天童山の如浄禅師の言葉の「国王や大臣といった権力者に近づかず、深山幽谷に住み、仏の道を行い、本当の弟子を育てなさい」という教えを厳格に守り通しました。

(歌意)春、夏、秋、冬のそれぞれをありのままに詠んだこの歌

の中に、道元は、この世の全てのものが本来ありのままの真実であり、ありのままの真実こそ尊いと述べている。

上の『正法眼蔵』の「自己を学ぶことは自己を忘れること」という一節は難解かもしれません。「学ぶ」と「忘れる」は一見、反対のことのようにも見えます。「自己を忘れる」とはどういうことでしょうか。

例えば「自分が、自分が」という気持ちも「自己」です。物事のありのままを受け入れ、自己の中にある欲望や感情を捨て、ひたすら座禅し、日常のことにひたすら専念することが大切である、道元は伝えているのです。

道元の教えは、人間とそれを取り巻く世界とは何かを追求した哲学でもあり、800年を経た今も現代人の心をとらえ、輝きを放ち続けています。

道元が執筆した最も知られる著書『正法眼蔵』は、32歳から54歳までの23年間に渡って書かれたもので、95巻にも及び、道元が捉えた禅の神髄が記されています。その思想は、後に世界の哲学者にも影響を与えます。明治から昭和にかけて、日本の僧によって禅が欧米に紹介されると、禅文化として若い世代からも支持され、「ZEN」という言葉が世界に定着しました。

自分の身体や様々な感情からも自分を解き放つ「身心脱落」から、大きな悟りを得た道元。次の言葉は、そんな道元の禅の世界を象徴する有名な言葉です。

仏道をならふといふは、自己をならふ也。

自己をならふといふは、自己をわするゝなり。

道元著『正法眼蔵』第1巻 現成公案巻より

(意訳) 仏の道を学ぶということは、自己を学ぶことなのである。自己を学ぶということは、自己を忘れることなのである。

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり

道元著『傘松道詠』より

check for 道元



立松和平 『道元禅師 大宋国の空』 東京書籍
和辻哲郎 『道元』 河出書房新社
百瀬明治 『道元 曹洞宗』 淡交社
山田史生 『絶望しそうになったら道元を読め!』 光文社
公方俊良 『道元禅師の言葉』 主婦の友社
ひろさちや 『すらすら読める正法眼蔵』 講談社
佐々木俊道 『目からウロコの道元と禅宗』 学研
『福井県史』 通史編2 中世 福井県
『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』 福井県立こども歴史文化館



道元が修行のため中国に渡った時のこと、食事係をしている老僧に出会い、食事をつくるのも修行と聞かされます。そして、座禅や経を学ぶだけが修行ではなく、日常のすべてが禅の修行であると気づいたのでした。道元が著した『典座教訓』にこの体験が記されています。

瓜生保

?年～1337年

南北朝時代の武将。 **杉山城主**。
新田義貞の金ヶ崎城の戦いで
知謀を巡らし奮戦。
現在、城跡などが**国史跡指定**。

どんな子だった?



北陸道の要所を守る武将の子として

瓜生氏は嵯峨天皇の子孫とされ、瓜生保の父である瓜生衡が鎌倉時代末期に、越後国(新潟県)の瓜生村から越前に移り、日野川上流の**杉山(南条郡南越前町)**に城を築いたとされます。杉山は北陸道の要所であり、山頂には山城が築かれ、山麓に城主の館がありました。

瓜生保は不明なことが多い武将ですが、子どもの頃は杉山を中心に、兄弟たちと野山を駆け回り、武芸の稽古を積んでいたことでしょう。その杉山城は、山城が存在した城山と山麓城下の一部約170ヘクタールが、昭和9年と昭和54年に国史跡の指定を受けています。

episode
1

朝廷を二分した南朝と北朝の動乱の中で

瓜生保が生きた時代は、鎌倉幕府の力が弱まり次の政権へと移り変わる渦中にありました。元弘3(1333)年、後醍醐天皇が討幕を果たし、建武の新政が始まりますが、公家重視の政策を行ったため、武士は新政権に不満を抱き、足利尊氏がその旗頭となって後醍醐天皇から離れて対立。新しい天皇を迎えて京都に北朝をたて、一方、後醍醐天皇は吉野(奈良県吉野郡吉野町)に南朝をたてます。そうした中で瓜生保は、南朝に味方する動きをしています。そして、延元元(1336)年10月、**新田義貞**が後醍醐天皇の皇子である恒良親王と尊良親王を連れて**金ヶ崎城(敦賀市金ヶ崎)**に入ります。軍記物語『太平記』には、援軍を求めてきた新田義貞の息子の義頭と、弟の脇

屋義助を迎えた際のエピソードが次のように書かれています。

杉山城から瓜生保と弟の重、照の三兄弟が、たくさんの酒や肴を持って、鯖波の宿(福井県南越前町)に出迎えた。また、人夫五、六百人に兵糧を持たせて軍勢の陣営にそれを分配した。(中略)ところがその時、先の帝から義貞らを討てと命令が出たという足利軍からの手紙が届き、瓜生保は謀略と疑いもせず「朝廷の敵に協力すれば天罰を受ける」と考え、杉山城に急いで戻り、門を閉ざしてしまっ

《『太平記(三)』第十七巻瓜生判官心替はりの事より意訳》



(県内) 南越前町 敦賀市 越前市

瓜生保の戦略と最期

『太平記』は物語性を高める脚色が多いとされ、このエピソードについても脚色の可能性は否めません。それについて福井県史は次のように解説しています。

瓜生保を含む越前の国人たちも、斯波高経をはじめとする幕

『太平記』は、その後、瓜生保の弟が、義助に兄の心変わりを告げた上で、義助の子どもを預かるシーンへと続き、そうした弟たちの動きを知った瓜生保は、新田軍に味方することを決めて戦略を立てます。

瓜生は、敵に陣を構えさせないように、新道、今庄、葉原、宅良など、四里（約16 km）にわたる地域の民家を焼き払い、湯尾の宿だけ焼かずに残した。やがて、六千余騎が深い雪の中、湯尾宿に到着。山越えに歩き疲れた兵士らは、民家に入るとぐっすりと寝込んだ。瓜生保は今が好機と夜の夜、野伏三千人を後方の山に上げるとともに、足軽など歩兵七百余人で勝関※の声を上げた。寝込んでいた敵の軍勢は、突然の勝関の声に驚き慌てふためき、武器も持たずに雪の中へ飛び出した。

《『太平記』第十八巻「義治旗を揚ぐる事、并 杣山軍の事」より意識》

この作戦で勝利した瓜生保は、その後、府中（越前市）で敵がたてこもる城を落とし、金ヶ崎城へ引き返す際、手前の葉原（敦賀市葉原）付近でついに討たれてしまいます。小説『新田義貞』（新田次郎著）では、その最期を次のように表現しています。

府方が次第に勢力を増していくなかで、ある者は幕府方、ある者は新田方と、それぞれの選択をしていたことは容易に想像できる。『太平記』巻一七の語る瓜生の変心や今庄浄慶・由良光氏の忠節は、越前の国人たちのそうした動向を示すものとして読みとることができる。

《『福井県史』通史編2中世より》

瓜生保自身は、弟の瓜生義鑑ぎかんぼう房と共に兵五百を率いて、木の芽峠を越えて金ヶ崎城に出撃した。包囲陣に奇襲を掛け、混乱に乗じて、老人や女、子供を脱出させようとしたのである。

奇襲は成功したかに見えたが、なにしろ敵は大軍であった。たちまち瓜生軍は足利軍に包囲され、瓜生保と弟の義鑑房は戦死し、二百人は討たれて、三百人はかろうじて杣山城に逃げ帰った。

この合戦は足利側の勝ちに終わったが、瓜生保が、金ヶ崎城から非戦闘員を助け出そうとして死んだことは、越前の国内に広く喧伝げんでんされ、また、足利軍の卑劣きわまる、兵糧攻めに対しては非難が集った。

《新田次郎著『新田義貞 下』より》

※兵糧：軍隊の食糧。

※野伏：中世、全国的に広まった農民の武装集団。山野に野宿して修行する僧。

山伏。

※勝関かつせきの声：戦いの時にあげる叫び声。

check for 瓜生保



吉川英治『私本太平記』講談社
『太平記 三』（兵藤裕己校注）岩波書店
新田次郎『新田義貞』新潮社
『史跡杣山城と瓜生保』南条町
『史跡杣山城跡』南越前町教育委員会
『武生市史』資料編人物・系譜・金石文 武生市
『敦賀市史』通史編上 敦賀市
『福井県史』通史編2中世 福井県



杣山城のあった山には、御殿の跡や水源として利用されていた池や、瓜生保の夫人や女房たちが絶壁の岩に袷をかけて飛び降り、自害したという言い伝えが残る桂掛岩などが点在しています。また、発掘調査と整備事業が行われ、現在、復元された礎石建物跡などを見ることができます。

新田 義貞



1301年?~1338年

後醍醐天皇に従い、鎌倉幕府の倒幕で
武功を上げて南朝側の武将となる。
敦賀の金ヶ崎城で足利軍と戦い
灯明寺躰(福井市新田塚町)にて敗死。

どんな子だった?



源氏の流れをくむ名門の誇りを胸に、武芸を磨きながら成長

義貞は、鎌倉幕府の御家人であった新田朝氏の長男または養子とされ、新田氏が上野国新田荘(群馬県太田市)に所領を持っていたことから、上野国の生まれと考えられています。義貞は武士の子として、上野国から上野の風の中で、元気に剣や馬などの武芸に励み、逞しく勇敢な少年に育っていききました。

文保2(1318)年、父の朝氏が亡くなると、義貞は17歳か18歳で新田氏の家督を継ぎ、8代目の当主となります。新田氏はもともと源氏の流れをくむ名門で、かつては広大な土地を開拓して新田荘を持っていましたが、義貞が家督を継いだ頃には、領地が減っており、決して裕福な暮らしではなかったようです。

episode
1

鎌倉幕府の倒幕から南北朝時代へ

少年期から青年期の義貞がよく描かれている小説に、「新田義貞」があります。そこには一人前の武士への第一歩を踏み出す姿が次のように書かれています。

義貞は十六歳の春を迎えた。この年、新田朝氏に鎌倉大番役催促があった。(中略)

東国の武士にとって鎌倉は京都につぐ夢の国であった。行って見たいと思わない者はなかった。義貞もその一人だった。五十人の郎党を率いての大番勤仕がいかに金がかかるか、それを考えるほどの年齢にはまだ至っていなかった。(中略)

基氏は周囲を見た。誰もいなかった。

「お前は鎌倉のすべてを見て来るのだ。道がどこでどう曲がっているか、どこにどのような屋敷があつて、そこには誰が住んでいるか、またその家の石垣の高さまで、頭の中へ覚えこんで来るのだ。そういうつもりでお前は鎌倉へ行かねばならぬ」
「なぜ、そんなことをしなければならぬのです」
その義貞の問いに基氏は、はっきり答えた。
「やがてお前が鎌倉へ攻めこむ時の為に必要なのだ」
基氏の声が義貞の中に重く沈んだ。

《新田次郎著『新田義貞』上より》

元弘3(1333)年、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇は天皇



(県内) 敦賀市 越前市
鯖江市 福井市 坂井市
(県外) 京都府 群馬県

忠誠を貫き、39歳で越前の地に命を散らす

による政治を復活させようとしています。しかし、建武の新政と呼ばれるその政治体制は、武士たちの支持を得られず、足利尊氏あしかがたかは後醍醐天皇から離れ、多くの武士が尊氏側につきまします。すると後醍醐天皇は新田義貞に尊氏の討伐を命じ、一方、尊氏らは光厳上皇の院宣いんせんを掲げて対立。京都に光明天皇を中心とした北朝を打ち立て、幕府を開きます。後醍醐天皇は京都から奈良の吉野へ逃れて南朝を打ち立てます。南北朝時代の始まりです。

建武3（1336）年、京都で敗れた後醍醐天皇は、自分の子を地方に派遣して南朝の拠点を作ろうとします。その一つに越前がありました。新田義貞は後醍醐天皇の皇子である恒良親王つねよしと尊良親王たかしながを連れて、真冬の峠を越えて越前の金ヶ崎城（福井県敦賀市金ヶ崎）に入ります。鎌倉幕府の崩壊から約半世紀にわたる動乱を描いた軍記物語『太平記』には、義貞に関する

様々な記述が登場しています。

10月11日、義貞は7千余騎で、塩津、海津に着き、七里半の山中を遠回りして木ノ芽峠を越えた。今年は例年よりも寒く、雪が甲冑かこうに積もり、また、道を見失い、夜には宿もなく、木の下や岩の陰に縮まって寝た。二百騎で後陣に打った隊も道を見失い、塩津の北で敵と戦ったが、馬も兵も凍えて皆自害して死んでしまった。

『太平記』第十七巻「北国下向勢凍死の事」より意訳

金ヶ崎城に入った義貞軍は奮戦し、日野川の戦いで勝利しますが次第に戦況は敗色が濃くなり、義貞は柚山城の瓜生保うりゅうたかに援軍を求めます。その間に尊良親王と義貞の息子の義顕よしのは自害し、恒良親王は北朝方に捕らえられてしまっています。

金ヶ崎城が北朝に落ちた後、一旦は義貞軍が府中（越前市）

にいた北朝軍を制圧して優勢を手にしたものの、義貞は予期せぬ出来事で最期を迎えます。義貞軍が現在の福井平野まで進軍し、北朝側について城を攻めていた時のことでした。日が暮れた後、50騎の兵を連れて偵察にいく途中、灯明寺（福井市新田塚町）で、300余騎の敵軍と遭遇します。

馬は名うての駿足だったが、5本もの矢が刺さり、小さな溝も越えられずに屏風を倒すように転んだ。この時、義貞が左足をくじいて、起き上ろうとするところへ白い矢が眉間の真中に立った。（中略）

義貞は、もはや万事休すと、自ら首を掻き切って深い泥の中

に自分の首が入るようにして、その上に臥せるように横たわった。

氏家中務丞光範みつのりは、咄を伝って走り寄り、その首を取って黒丸城に帰っていった。

『太平記』第二十巻「義貞朝臣自殺の事」より意訳

首を取られた遺骸は輿こしに乗せられ、8人の時宗僧によつて往生院（坂井市丸岡町にある称念寺）に運ばれ、葬儀が営まれたとされています。

政変を機に頭角を現した義貞。そして、乱世に翻弄ほんろうされながらも貫き通した天皇への忠誠心。それは後に武人の鏡と称され続けていくこととなります。

check for 新田 義貞



- 石崎洋司 『太平記』 岩崎書店
- 高尾察誠 『新田義貞公と時衆・称念寺』
- 新田次郎 『新田義貞』 新潮社
- 山本隆志 『新田義貞 関東を落すことは子細なし』 ミネルヴァ書房
- 平岩弓枝 『21世紀版少年少女古典文学館（14）太平記』 講談社
- 『マンガ太平記』（甲斐謙二画・兵藤裕己監修） 河出書房新社
- 『福井県史』 通史編2 中世 福井県
- 『図解福井県史』 福井県
- 『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



坂井市丸岡町の称念寺には、義貞の墓所があり、福井県指定史跡になっています。また、福井市毛矢の藤島神社と同市新田塚町の新田神社は、義貞を祀っています。新田塚という町名は、義貞戦没地の伝承に由来するものです。

畑時能

?~1341年

南北朝方の新田義貞に従い各地を転戦。
鷹巣城(福井市高須町)や
鷲ヶ岳(勝山市・永平寺町)での
激戦が軍記物語の『太平記』で有名。

どんな子だった?



相撲を好み、無敵の強さを誇った青春期

畑時能は、南北朝時代を舞台にした軍記物語の『太平記』によると、名を六郎左衛門時能ともいい、武蔵国秩父の出身とされます。

相撲を好み、16歳の頃には時能に勝つ者は関東八力国の中に一人もいなかったといいます。体格は筋肉が太く盛り上がって

いたと記され、人並みはずれた身体能力であることが強調されています。また、後に移り住んだ信濃国では、馬に乗ったまま弓で獲物を仕留める猟をして生活していたため、馬で険しい斜面や岩場を駆け下りることができるといった、人間業とは思えない能力を持っていたとされます。

episode
1

読者をワクワクさせた『太平記』のスーパーヒーロー

時能が活躍したのは、南北朝時代。『太平記』によると、南朝の新田義貞軍に参加し、義貞が戦死した後は、義貞の弟の脇屋義助に従い、斯波高経の軍と戦います。『太平記』には越前各地での時能の活躍ぶりが詳しく記され、勇猛であらゆる武芸と謀略に優れ、さらにその超人的な能力は、中国の古い物語に登場する伝説のヒーローたちを上回るとも語られています。屈強な仲間2人と不思議な犬を従え、敵を打ち負かす姿は、現代の映画やテレビ番組のスーパーヒーローのようです。

馬に乗ったまま険しい斜面や岩場を駆け下り、周の穆王に仕えた馬術の名人も、畑時能には及ぶまいと思われた。水泳も極

意を会得し、手に入れるのは危険とされる黒い竜の顎の下にある珠でさえ、奪い取ることさえできる。弓術については弦を鳴らすだけで、遙か彼方の樹の上の猿を落とすことは確実であった。

戦略は優秀で、人を籠絡し、気力は充実して、決定したこと心弱く曲げることはなく、戦場に臨むたびに敵を降参させた。強い敵との戦いにおいては、漢の高祖の家臣樊噲・周勃も知らない戦い方を身につけていた。

彼の甥に大夫房快舜という乱暴者の僧がいた。また、仲間には悪八郎という大力の者がいた。さらに犬獅子という名の不思議な犬が一匹いた。畑時能は犬を先にやって、城の警備の様子



(県内) 南越前町 越前市 鯖江市
福井市 永平寺町 勝山市
(県外) 埼玉県 長野県 石川県加賀市

鷹巣城や鷺ヶ岳で奮戦の末、

迎えた最期

を探らせる。敵陣の警備が厳しい時は、この犬が吠えて城から走り出てくる。反対に、敵が寝込んで、夜の巡回も終わった時には、城から走り出てきて、尻尾を振って知らせるので、この犬に案内させて三人一緒に城へ入り込み、大声をあげて斬って回ったので、数千人の敵軍は驚いて慌てふためき、結局は城を

時能の越前での戦いについて、『福井県史』と『勝山市史』は次のように解説しています。

『太平記』の語る越前最後の戦いは、畑時能らの籠もる鷹巣城攻防戦である。(中略)十月末、籠城の限界を察した時能は、わずかな手勢を二分して一方を一井氏政につけて残し、自らは他方を率いて伊知地山(勝山市鷺ヶ岳)に拠点を構築し、奇策を用いて大軍を一蹴したものの、自身も傷ついて悶死したという。

《『福井県史』通史編2中世より》

『太平記』(巻二二)には、高経軍の攻撃を受けた畑時能は、高栖城を逃れて十月二十一日に一六人の兵とともに伊地(伊知地)山に立て籠もったと見えている。これを見たと高経軍は豊原寺と平泉寺が寝返って南朝方になったと勘違いをしたというが、伊地山の位置から考えると、畑時能は少なくとも豊原寺・平泉寺の支援を期待していたのであろう。しかし両寺とも時能を支援せず、時能はこの地で戦死したと伝える。伊地山の場所は特定できないが、近世の地誌類はこれを市内伊知地の鷺ヶ岳に比定しており、山上に時能の碑が建てられている。

《勝山市発行『勝山市史』第二巻・原始～近世より》

落とされてしまうのである。

《作者不明『太平記』第二十三巻「畑六郎左衛門時能の事」より意訳》

また、『永平寺町史』では、鷺ヶ岳の鷺嶺城跡の遺構について解説しています。

『浄法寺村誌』によれば、山頂には百余間四方の平地があり、北の方には幅一〇間、長さ三、四〇間ほどの堀切があるという。大正八年ここに「畑將軍戦死之地碑」が建てられた。また鷺ヶ岳から栃原へ流れ落ちる溪流を「時能川」と呼び、この他大馬場・小馬場や御蔵畑の遺名も畑時能時代のものに関係すると伝える。なお早津良規氏の説によれば、畑時能が籠った所は鷺ヶ岳山頂ではなく、その前面峰続きの屋敷山で、現在も濠跡など山城の形跡が残っているという。

《『永平寺町史』通史編より》

※籠絡：人をうまくまるめこんで、思い通りにあやつること。
 ※籠城：城に立てこもって敵を防ぐこと。
 ※奇策：人の予想もしない奇抜なはかりごと。
 ※悶死：悶え苦しんで死ぬこと。
 ※高栖城：鷹巣城

check for 畑 時能



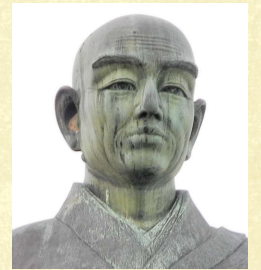
南條範夫『燈台鬼(子守りの殿)』光文社
 『日本古典文学全集 太平記3』(長谷川瑞校注・訳) 小学館
 『福井県史』通史編2中世 福井県
 『勝山市史』第2巻・原始～近世 勝山市
 『永平寺町史』通史編 永平寺町
 『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



坂井市三国町では、毎年5月に、勇壮な武者人形の山車巡行で知られる三国祭が行われます。人形は義経や弁慶をはじめ、様々な時代のヒーローたち。これまでに畑時能の武者人形の山車が巡行した年もあり、日本の歴史を彩るヒーローの1人として、畑時能の人気のうかがわれます。

蓮如 れん によ



1415年～1499年

親鸞の教えを広めた**本願寺中興の祖**。
吉崎に布教拠点の吉崎御坊をつくり
「御文」や「六字名号」を門徒（信者）に与え
北陸一帯に浄土真宗（真宗）を布教。

どんな子だった？



衰退した寺を再び盛り立てるために、必死に親鸞の教えを学ぶ

蓮如は幼名を布袋丸ほていまるといい、本願寺第七世の存如の長男として、本願寺（京都市にある現在の知恩院宗泰院）で生まれました。母は、布袋丸が6歳の時に、存如が本妻を迎えたことにより、本願寺を去ります。その時、母は幼い布袋丸に、生涯をかけて親鸞上人の教えを広め、再興してほしいと告げたといいます。

布袋丸は、母親の言葉を守り、一心に念仏の教えを学びます。蓮如の息子が父の遺徳を偲んで著した『蓮如遺徳記』には、15歳の布袋丸が、本願寺再興の志を持ったことが記されています。そして、17歳の時、蓮如は、青蓮院（京都市）で得度を受け、親鸞の『浄土文類聚鈔』など、多くの聖典を書写しました。

episode
1

誰にでもわかりやすく、受け入れやすい蓮如の教え

6歳の蓮如を描いた絵が、福井市藤島町の超勝寺に伝わります。「鹿の子の御影」とも呼ばれるそれは、蓮如の母親が本願寺を去る前、絵師に描かせたものと伝わり、後に蓮如が鹿子文様を書き入れさせたものといわれます。

児童書の『蓮如物語』には、「鹿の子の小袖」というタイトルの章で、子どもの頃の蓮如の様子が続くように語られています。

京の都の鴨川の東、山を背にした大谷のあたりに本願寺という小さい寺があった。

まわりには立派な寺院がいくつもそびえている。本願寺はまるで肩をすくめるようにそのあいだに建っていた。

貧弱な本堂につづく粗末な住居には、本願寺の身内の何家族かがひっそりと暮らしていた。

そのなかでもいちばん若い、まだ二十代の夫婦が布袋丸の両親だった。彼らにはその建物のいちばんはじっこ、窓のない暗い部屋があてがわれていた。

板じきのせまい部屋である。あちこちにすきまがあつて、風つつよい晩はえんりよなく冷たい風が吹きこんでくる。

《五木寛之著『蓮如物語』鹿の子の小袖より》

長祿元（1457）年、父親が亡くなり、第八世を継いだ蓮如は、近江（現在の滋賀県）での布教に力を注ぎます。蓮如は



（県内）坂井市
（県外）京都府 滋賀県 大阪府

一向一揆へと動き始めた浄土真宗門徒

蓮如が説く平等の教えは、苦しい生活を強いられていた人々を一揆へと駆り立てていきました。北陸では加賀の本願寺派が各地で闘争を始めます。この一揆は、本願寺の門徒が多かったため「一向一揆」とも言われます。

近世の真宗寺院の由緒書によると、この時期に蓮如のもとへ参じて他宗から本願寺系に転派したという由緒をもつ寺はかなりの比率になります。(中略)蓮如が吉崎に滞在した四年間で北陸の宗教状況は大きく変化し、このような本願寺系信仰のひろがりや戦国期社会に一般的となる惣的結合を背景として、一向一揆が形成されていったのです。

《『図説福井県史』中世13「浄土真宗のひろがり」より》

布教に際して「御文(御文章)」と「名号」を門徒(信者)に与えました。「御文」とは、仏の教えを蓮如の言葉でわかりやすく説いた手紙です。また、「名号」とは「南無阿弥陀仏」の六文字が書かれたもので、唱えるだけでご利益があるとされました。誰の心にも届く言葉による布教、それは、不遇な幼少期に育まれた優しい人柄が、影響しているのかもしれませんが。誰でも救われるとする蓮如の教えは、様々な人々に広く浸透していきま

した。
しかし、近江に浄土真宗が広まると、比叡山ひえいざんの僧たちは、それに敵対心を持ち、本願寺を打ち壊してしまいます。蓮如は近江を転々とし、57歳の時、越前の吉崎(あわら市吉崎)に布教の拠点を設けます。その坊舎は「吉崎御坊」と呼ばれ、多くの参詣者が集まり、門前には宿坊しゆくぼうが建ち並ぶまでになりました。

親鸞は個人それぞれの信仰の確立をもとめて、ひとすじの道をまっすぐ歩いてゆきました。(中略)

しかし、蓮如はちがいます。親鸞がともした純粋な信仰の明かりを、闇の中にうごめく無数の人びとにひとりでも多く手渡そうとする。嵐にゆれる灯火を、決して消すまいと必死の努力をつづけるのです。(中略)

蓮如は親鸞とちがって、曲がりくねったデコボコ道を、ときには妥協し、ときには演技しながら、彼なりに必死で戦い抜いたのです。親鸞を求道者とするなら、蓮如は伝道者と言うべきかもしれません。

《五木寛之著『蓮如―聖俗具有の人間像』より》

蓮如は、勢いを増す一向一揆を避けて吉崎を去り、河内(大阪府)に御坊を建立。教団は全国的な大教団に拡大していきま

す。そして、文明13(1481)年、京都の山科やまのしなに御影堂みえいどうと阿弥陀堂あみだどうを建て、幼い頃からの念願であった本願寺の再興を果たします。
一方、加賀の一向一揆は、守護大名の支配を退け、以後、天正8(1580)年に織田信長に敗れるまでの100年近く「百姓の持ちたる国」と呼ばれるようになります。また、一向一揆は越前にも波及し、信長の一向一揆攻めで越前は、悲惨な戦いが繰り返される戦場となりました。

check for 蓮如



- 五木寛之『蓮如物語』角川文庫
- 五木寛之『蓮如―聖俗具有の人間像』岩波書店
- 五木寛之『蓮如 われ深き淵より』中央公論社
- 笠原一男『蓮如』吉川弘文館
- 『図説福井県史』福井県
- 『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



浄土真宗大谷派の行事の一つに「蓮如上人御影道中」があります。300年間続くこの行事は、信徒たちが「御影」(蓮如の肖像画)を携え、東本願寺(京都市)と吉崎御坊(あわら市吉崎)を往復して練り歩くもので、春の風物詩ともなっています。

武田 信賢

たけだ のぶかた

1420年～1471年

安芸武田氏当主の次男。
兄の急死により若狭の守護職を継ぎ
若狭武田氏の基礎を築く。
応仁の乱では副将として東軍に属す。

どんな子だった？



安芸武田氏と甲斐武田氏を両親に持つ子ども

武田氏は鎌倉時代から室町時代にかけて、甲斐国から各地に分流し、名前には「信」の文字がよく使われています。信賢の父は安芸（広島県中央部）を支配していた安芸武田氏の当主信繁。母は甲斐（山梨県）を支配していた甲斐武田氏の当主信春の娘。信賢はその次男として生まれました。

少年時代の信賢について、詳しいことはわかっていませんが、大人になってからの身長は約237センチメートルもあったとされ、誇張があるとしても相当な大男で、武芸に優れていたと伝わります。また、短歌などの文芸にも秀でていました。

episode
1

安芸から若狭へ入った武田氏（若狭武田氏の始まり）

武田氏と若狭の関係は室町時代の中頃に始まります。安芸武田氏は、第6代將軍の足利義教の命令により、永享12（1440）年5月、若狭と丹後を支配していた一色氏を討伐。その功により武田信繁の長男（信賢の兄）信栄が、若狭守護職に就き、6月に家臣団を連れて若狭に入り、信賢もこの時、兄とともに若狭にやってきました。

ところが翌月、信栄が病死。急ぎよ弟の信賢が若狭守護職を引き継ぐこととなります。信賢の動きは、『福井県史』に詳しい記述があります。

「文安年中御番帳」によれば、文安年間（一四四四～四九）の

信賢は、相伴衆の次に格付けされる「外様大名衆」一九名のなかに列しており、長祿二年（一四五八）ごろにも、同じく相伴衆の次位にあたる「国持衆」（この下に準国持衆・外様衆がある）とされていた。すなわち、信賢は相伴衆に列していた兄信栄よりはやや格を下げたものの、幕府内で重要な地位を占めていたといえる。なお彼の弟国信は御供衆とされ、しばしば義政の供を務めている。（中略）

信賢の家督相続から一年経った嘉吉元年（一四四一）六月に嘉吉の乱がおき、諸大名が赤松満祐退治に向かった。（中略）
武田軍は播磨国和坂・人丸塚（兵庫県明石市）などの合戦に参加したが、若狭で一色氏の牢人が土一揆と結んで蜂起して守



（県内）小浜市 大飯郡高浜町・おおい町
（県外）京都府

応仁の乱では東軍の副将を務める

護代を追放したため、急ぎ兵を播磨から若狭に下し、十月に大飯郡佐分郷、十一月に小浜をそれぞれ攻略した。このあと一色牢人蜂起が繰り返される。

室町期の守護は原則として在京が義務づけられていた。信賢もあとでふれる一時期を除いてずっと在京し、「国持衆」として活動していたはずであるが、具体的にわかるのは軍事行動ぐらゐである。(中略)

信賢は室町幕府守護として京都に足場を置きつつ、一色牢人蜂起で揺れる若狭と、しばしば大内氏の侵攻にさらされた安芸国の分郡に支配基盤を確立していかなければならなかったが、安芸の分郡支配はまだ健在の父信繁が本拠山城(銀山城)に

いてこれにあたり、信賢は幕府への出仕と若狭経営に専念した
ものと思われる。

《『福井県史』通史編2中世 第三章より》(文中の出典資料名は省略)

信賢が守護となった若狭は、一色氏に仕えていた小浜住人との紛争や、彼らと手を結んだ土一揆の蜂起など、一色氏の勢力が根強く残り、政情は不安定なものでした。しかし、享徳3(1454)年、信賢は土一揆を封じるため、幕府に徳政令の許可を求め認められ、また、翌年には、若狭にある多くの寺社に禁制を出しています。

応仁元(1467)年、世に言う応仁の乱が始まると、信賢は東軍の副将として戦います。この間、朝倉氏が東軍へ寝返り、後に朝倉氏と若狭武田氏は婚姻関係を結んでいます。

応仁2(1468)年、信賢は小浜に城を築き、翌年には京都の北白川にも築城。しかし、多くの戦死者を出して劣勢となる中、文明3(1471)年6月2日、信賢は病死してしまいます。若狭に入って30年余り、戦に明け暮れた生涯でしたが、その間に文化人としての側面も見られ、和歌に秀で、毎年数回にわたって歌会を京の館で開催したほか、とんち話で知られる一休宗純をはじめ、多くの文化人と交流を持っていました。

その後の若狭武田氏についても、ここで少し触れておきましょう。信賢の死後は弟の国信が守護職を相続。その子孫が若狭武田氏を代々継ぎますが、1500年代に入ると相継ぎを何度も起こしています。そして、天正10(1582)年、当主

の元明が本能寺の変で明智光秀に味方したため、自害に追い込まれ、若狭武田氏は滅亡。若狭の歴史に再び登場することはありませんでした。ところが実はこんな縁も…。元明の妻は京極高次の妹童子。元明の自害後、たいへんな美女であった童子に眼をつけた豊臣秀吉は、童子を側室にします。そうした童子の功もあって高次はやがて出世。そして、高次は家康から若狭を与えられ、妻のお初とともに小浜へ。童子の亡き夫の領地が兄(弟)の領地となったのでした。

※守護職：鎌倉幕府・室町幕府が国単位で設置した軍事指揮官・行政官。

※土一揆：室町中期、さかんに起こった農民、地侍の武装蜂起。

※徳政令：内容は徳政令ごとに異なるが、貧困化を救済するため、貸借関係などを破棄する命令。

※禁制：権力者が禁止事項を公示した文書。

check for 武田 信賢



高野賢彦『安芸・若狭武田一族』新人物往来社
『小浜市史』通史編上巻 小浜市
大森宏『戦国の若狭 一人と城一』
『中世若狭を駆ける 一若狭武田氏とその文化一』若狭歴史民俗資料館
米原正義『戦国武士と文芸の研究』桜楓社
『福井県史』通史編2中世 福井県



信賢の法名は「大通寺殿大人宗武」とされ、「大人」とは、信賢が7尺9寸もあった大男であったことによるといわれます。しかし、大通寺という寺は現在の小浜にはありません。また、別の記録には、光徳寺伝道祐教山大居士と記され、小浜市西津にある曹洞宗光徳寺は武田氏の家紋と同じ寺紋になっています。

朝倉孝景

(英林孝景)



1428年～1481年

戦国大名朝倉氏の初代当主。
もとは越前守護斯波氏の重臣であったが
越前の支配を掌握して越前守護となる。
分国法「朝倉孝景条々」(朝倉敏景十七箇条)を制定。

どんな子だった?



昼は武芸を磨き、夜は論を交わす

孝景は、斯波氏の家臣であった家景の子として生まれました。幼名は小太郎、成長して教景と改め、さらに、主君斯波義敏の「敏」をもらい敏景と改名しますが、主君と対立後は教景に戻し、その後、孝景と名乗ります。朝倉氏の歴代当主に孝景を名乗る人物が2人いるため(孝景のひ孫で第4代当主も孝景)、初代は法名の「英林」をつけて呼ばれることもあります。

軍記物語の『朝倉始末記』によると、孝景は、子どもの頃から才知がひとより勝れ、明け方から夜まで怠けることなく、昼は武芸者を集めて弓や馬の稽古、戦術の研究を行い、また、夜は儒教や仏教、歌などの専門家を招いて論を交わしたと記されています。

episode
1

兵たちと豆や酒を分ちあい、ともに働き、慕われた孝景

朝倉氏の祖先は、但馬国(兵庫県)の豪族といわれ、南北朝時代に、主君の斯波氏に従って越前に入ったのが、越前の朝倉氏の始まりとされます。

戦国大名朝倉氏の初代当主となった孝景は、越前朝倉氏の初代広景から数えて7代目にあたります。父の家景が49歳で亡くなり、22歳で孝景が家督を継ぎました。青年となった孝景について、軍記物語の『朝倉始末記』では、こう評価しています。

成長するに従って智・仁・勇の三徳を備え、豆を食べるときも兵たちと一緒に掴んで食べ、樽の酒も兵たちと均しく分けて飲んだ。早朝から深夜まで兵とともに動いて兵を励まし、負傷

者を治療し、死を悼んだ。(中略)

兵たちとの主従関係は水魚の交わりのように親密で、もし命令があれば何があっても身を捨てて忠義を重んじ、骨身を惜しまず尽くしたいと兵たちが勇ましい思いを抱いているほどで、孝景の威勢には、なびかない草木もない。

《作者不明『朝倉始末記』第1巻より現代文にて意訳》

また、現代の歴史解説書『越前朝倉一族』では、孝景の年忌法要の際、僧によって読まれた「十三年忌香語」と「三十三年忌陞座」から、孝景の人物像に触れています。

(県内) 福井市
(県外) 京都府



応仁の乱を転機に、一乗谷に朝倉氏繁栄の礎をつくる

両法語とも、孝景を「文に克く武に克くし、仁あり義あり威ある」人物で、『六韜三略』の兵法書を学んで軍略に卓越した武人であり、いつぼうでは、礼樂を問い、論語や孟子を読破して儒教の「仁」を実践した、まさに文武両道に秀でてた人物として顕彰している。路傍で孝景を一目した將軍足利義教も、「真の英物なり」と看破したという。(中略)

孝景の文芸については、敏景と称していた頃、歌僧として知られていた招月庵正徹と交流して、長祿元年(一四五七)七月

より同二年二月まで洛内において毎月八日に月次(月例)の和歌の会を興行していたことが知られるが(「草根集」)、「英林居士十三年忌香語」によると、孝景は「洛東から洛西へと佳境を求めて居を移し、館を築いた」とされるから、京都の朝倉邸で歌道に励み教養を高めながら、同時に、公家衆や在京する諸將と親交を深めて中央政界における情報収集に余念なく努めていたのである。

《松原信之著『越前朝倉一族』第4章4より》

『朝倉孝景条々』より抜粋して現代文意訳

- ・世襲制ではなく、能力や忠誠心によって人材を採用せよ
- ・高価な名刀よりも百本の槍を備えよ
- ・京の都から猿樂を呼んで見物するより、
- 越前国内の猿樂を育成せよ

・年に三度は正直な者に国をまわらせ、農民の声に耳を傾けよ

孝景の館があった一乗谷(福井市城戸ノ内町)は、以降、朝倉氏第5代の義景まで、103年にわたって越前統治の中心として栄え、都に劣らない文化を築いていきます。

応仁元(1467)年、斯波氏の内紛と足利將軍家の跡目争いが、各地の守護を巻き込んだ戦へと拡大していきます。世にいう応仁の乱です。孝景は主君の義敏と対立する斯波義廉側につき、西軍として武功を上げ、名を馳せました。ところが、文明3(1471)年、孝景は越前守護の座を条件に、東軍へ寝返り、やがて越前をほぼ制圧。約束どおり越前守護に任じられます。こうした経緯から、日本史の中で孝景は「下克上」の典型的な人物ともされます。

越前守護になった孝景は、朝倉一族の心得を綴った『朝倉孝景条々』(別名『朝倉孝景十七箇条』)をつくります。戦国大名の「分国法」として有名なもので、近年の研究では、孝景だけでなく、その八男である宗滴の関与があるという説が有力になっています。

check for 朝倉 孝景



松原信之『越前朝倉一族』新人物往来社
 佐藤圭『朝倉孝景 一戦国大名朝倉氏の礎を築いた猛将』戎光祥出版
 藤居正規『朝倉始末記』勉誠社
 『越前・朝倉氏関係年表』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
 『福井県史』通史編2中世 福井県
 『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

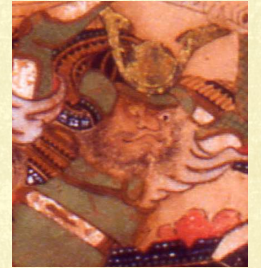
福井県立こども歴史文化館



孝景が越前守護に任じられた後、斯波らの連合軍が再び越前に侵攻し、朝倉を悩ませます。孝景はその最中に病に罹り、54歳で死去。跡を継いだ息子の氏景が、叔父たちとともに越前を統一しました。

真柄 十郎左衛門

(直隆)



?年～1570年

真柄庄(越前市)の土豪。朝倉氏の家臣。
大太刀を使い
豪快な武勇伝で有名な武将。
信長軍との姉川の戦いで戦死。

どんな子だった?



大男で剛力という強烈なキャラクターからできた誕生秘話?

真柄十郎左衛門は、確かな記録が乏しく、詳しいことがわかっていないわりに多くの逸話を持つ武将です。その一つ出生をめぐる伝説は「真柄のお秀」という講談の題材にもなっています。

美男子で知られる父の真柄刑部が敦賀に泊った際、お秀という大柄で不器量な女中に出会います。刑部が「お前のような女を嫁

にして、立派な子をもうけたい」とからかったことを発端に、刑部はお秀に追いかけてられて何度も逃げることに。しかし、ついに朝倉敏景の仲人で夫婦になり、やがてお秀は子を宿し、なんと15

か月目に大きな赤ん坊を出産。それが十郎左衛門であったという話が、講談では軽妙な口調に乗せて、おもしろおかしく語られます。

episode
1

身長約2メートル、体重は200キログラム以上

豪傑として語り継がれる真柄十郎左衛門は、身長約2メートル、体重は200キログラム以上の大男。「太郎太刀」という名の3メートルもの大太刀を振り回し、敵をなぎ倒す戦いぶり、軍記物語や講談、浪曲の名シーンとして語られてきました。真柄氏の本拠地は越前国味真野真柄庄(越前市上真柄)。現在も真柄の名を町名に残し、同町の徳間垣内と呼ばれるところには、館があったと伝えられます。また、戦の際には朝倉家臣団の一員として戦いました。『朝倉始末記』や『信長記』などには、次のような十郎左衛門の記述があります。

■朝倉義景が加賀国(石川県)に出兵した際、十郎左衛門と息

子の隆基が大太刀を振り回して活躍。戦が終わると、その大刀を白山比咩神社に奉納。

■足利義秋(義昭)が朝倉氏を頼って一乗谷に入った際、歓迎の宴で十郎左衛門は、二本の大太刀を頭上で振り回し、息子の隆基は、黒い卵形の大石を十回以上も空へ投げて剛力ぶりを披露。

■姉川の戦いの時、十郎左衛門の周囲は四、五十間四方に敵の死体が散らばり、まるで田んぼを耕したようになった。最期は匂坂式部と五郎次郎、六郎五郎の3兄弟が十郎左衛門に立ち向かい、槍の先が十文字の刃になっている十文字槍で押さえ、ついに十郎左衛門は首を取られる。

(県内) 越前市味真野地区
(県外) 滋賀県長浜市 福岡県筑紫市
新潟県新潟市

各地に残る十郎左衛門と息子の多彩な伝承

十郎左衛門の遺体は、家臣が真柄庄まで運んで葬ったと伝わり、今も越前市の興徳寺境内に墓があります。

福井県立歴史博物館が所蔵する「姉川合戦図屏風」には、大太刀をかざす十郎左衛門と、白い馬に乗った匂坂式部、十文字槍を構えている匂坂六郎五郎吉政が描かれています。また、熱田神宮（愛知県名古屋市）には、十郎左衛門ゆかりの「太郎太

十郎左衛門とその息子にまつわる話は、武勇伝だけではありません。墓のある興徳寺や敦賀の杵見では子どもを守り神として信仰の対象となり、また、新潟県では油田発見者、福岡県では紙漉きを伝えた人物として語り継がれています。

興徳寺の北東数十メートルの農免道路に面した所に、「おこり地蔵」と呼ばれている地蔵がある。土地の古老によると、昔は高熱にかかった子供が親達が、その子連れてよくお参りに来たという。この地蔵の光背に「元龜式年辛未（1571）五月二十五日 為逆修之〇志也」とある。「逆修」とは若くて死んだ者のために、年長者が冥福を祈ることである。十郎左衛門父子の尊属（父母・祖父母など）が、戦死した十郎左衛門父子の一周忌の前に供養のために、この地蔵を建てたものと思われる。敦賀市の杵見にも、真柄十郎左衛門の子どもの病氣回復にかかわる伝説がある。「牛石伝説」である（中略）。おこり地蔵や牛石伝説によれば、真柄十郎左衛門は子供の守り神である。彼には姉川で戦死した隆基をはじめとして、隆重・景元・新左衛門・新右衛門・新之丞の男子がいた。たぶん評判の子煩悩で子供好きであったのだろう。

刀」と「次郎太刀」が奉納されています。「太郎太刀」は刃渡り221・5センチメートル。「次郎太刀」は刃渡り約166・7センチメートル。「次郎太刀」は姉川合戦の直後に奉納されたもので、南北朝時代の名刀匠であった越前の千代鶴国安（越前打刃物の祖とされる）の朱銘があります。

《笠嶋怜史著『味真野夜話―伝説・史話・観光―』より》

真柄十郎左衛門の次男隆重生き残って伊勢に逃れ、諸国を巡って越後に入り、帰農を願って許され、名を真柄仁兵衛貞賢と改め、越後真柄家の宗家となった。新津油田の発見は文書に残された確かな記録によると慶長13年（1608）柄目木の真柄仁兵衛が近郷の山中で石油の湧出を発見しこれを採取したのが最初である。

三男景元は出家して日蓮宗の僧となって日源と名を改め、文禄4年（1595）春に筑後国溝口村を訪れて福王寺に留錫し、新左衛門、新右衛門、新之丞を伴って矢部川の畔に紙漉き場を設けて村人たちに紙漉きの技を手ほどきし、生業の道を拓いた人で九州地方の紙祖といわれた。

《不老区編『北陸の豪勇・真柄十郎左衛門と大太刀』

そしてその一族と産業の関わり』より要約》

※講談：軍記や武勇伝など演目に、張り扇で台を打って場面を盛り上げながら語る話芸。

※浪曲：三味線の伴奏を入れ、語りにもロディをつけた話芸。

※留錫：僧が一時滞在すること。

check
for

真柄 十郎左衛門

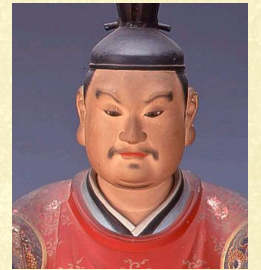


笠嶋怜史『味真野夜話 伝説・史話・観光』味真野史跡保存会
齋藤楓堂『ふるさと味真野』武生市味真野公民館
『武生市史』資料編 人物・系譜・銘文 武生市史編纂委員会
『鯖江郷土史懇談会 会誌第15号』
『真柄十郎左衛門伝 北国の豪勇』真柄十郎左衛門顕彰会
藤居正規『朝倉始末記』勉誠社
『徳川家臣団子孫たちの証言』静岡新聞社



熱田神宮や白山比咩神社に伝わる大太刀のほかに、敦賀市の気比神宮には、十郎左衛門ゆかりの刀の鞘があり、小豆3升（約5.4キログラム）が入る巨大なものであったといえます。残念なことに、その鞘は太平洋戦争時の敦賀空襲で焼失しました。

逸見 昌経



?年～1581年

室町後期の若狭国高浜城主。
若狭武田氏の内紛で抗争を繰り返した後
武田氏と離反し、織田信長につく。
朝倉攻めや一向一揆討伐に参戦。

どんな子だった?



甲斐源氏の流れをくむ逸見一族の当主

逸見一族は甲斐源氏の流れをくみ、同じく甲斐源氏の武田氏に仕えて安芸国(広島県西部)から若狭へ入ってきました。応仁の乱では武田勢として京都内外で戦い、軍団の中で重要な一軍であったのが逸見氏でした。昌経も当初は若狭守護の武田氏に仕えますが、その幼少期については、生まれた年をはじめ全くわかっていません。

逸見氏は若狭武田氏の家督争いに乗じて、武田氏に取って代わろうと反乱を起こし(永正・天文)、2度とも失敗しています。この反乱の後、昌経は居城の碎導山城(高浜町宮崎)の拡張整備を急いで行いますが、その後も家督争いが起こり、その運命は乱世の嵐の中で二転三転すること…。

episode
1

内紛が続き、力を落としていく若狭武田氏の中で

昌経が碎導山城(高浜町宮崎)の守りを強固にした頃、武田氏は当主の信豊と息子の義統が再び対立。信豊には昌経や粟屋勝久らがつき、義統には越前の朝倉義景が味方します。永禄4(1561)年正月に戦闘が始まり、6月には昌経の碎導山城一帯で大規模な戦いとなり、ついに碎導山城は落城。昌経は敗退しますが、永禄8(1565)年、海岸に高浜城を新たに築城。高浜城では水軍も編成し、丹後方面からの侵入を防ぐ役割も担ったと考えられます。しかし、戦の火種は外敵よりも若狭武田氏の中にくすぶり続けていました。『福井県史』では次のように解説しています。

永禄九年閏八月には、小浜の住人や義統の子である元明の擁立を企てる熊谷統直が蜂起するという反乱も生じている。義統を支持する遠敷郡の武田信方や大飯郡の逸見昌経・武藤友益らが出陣し、幕府奉公衆本郷信当の参陣もあって、この反乱はどうか鎮められた。
しかし若狭国内は、武田氏家臣の離反・分裂が続く戦闘が繰り返されるといふ混乱した状況からもはや抜け出すことはできなくなっていた。
松永久秀の謀叛により兄である將軍義輝を殺害され近江に逃れていた足利義秋(のち義昭)は、妹の嫁いだ義統を頼り同年八月二十九日に若狭へ入ったが、反乱がうち続き家臣統制力を

(県内) 高浜町



失った武田氏をあきらめ、二日後には朝倉氏を頼り越前に赴かざるをえなかった。(中略) 武田氏の親類や被官たちは「逆意」を企て「國中錯乱」した状況に陥り、幼少の元明が受け継いだ家督は「断絶眼前」の様相を呈していく。若狭は内部崩壊の極に達していたのである。

《福井県史》通史編2中世より (文中の出典資料名は省略)

家督争いが絶えなかった若狭武田氏は次第に権威を落とし、

先見の明を発揮して信長の配下に

武田氏に合力して三方郡の粟屋勝久らを攻めていた越前の朝倉氏は、こうした状況の若狭に対して永禄十一年八月に遠敷郡まで兵を進め、遠縁となる元明を越前へ救出した。これをもって八代約一三〇年続いた武田惣領家による若狭支配は事実上終止符が打たれたことになる。(中略)

そして八月の朝倉氏による若狭侵攻に引き続き、將軍義昭を美濃に迎えた信長が九月に義昭をとまない上洛すると、国主を失い分裂・抗争を続けていた武田氏家臣たちは、元明を保護する朝倉氏と、將軍とともに上洛を果した信長の、いずれの陣営につくかの選択をにわかに迫られることになった。こうして若狭は、内部崩壊のすえに、朝倉氏と織田信長による対立抗争の渦中へと巻き込まれていくことになる。

《福井県史》通史編2中世 第四章より (文中の出典資料名は省略)

元亀元(1570)年、信長が朝倉攻めに出陣すると、昌経ら旧武田家臣は、信長を熊川に出迎えています。しかし、この時の朝倉攻めは、浅井長政の寝返りにより失敗に終わりました。

この時期の若狭は、まさに混沌とした中にありました。

昌経は、永禄9(1566)年に起こった若狭武田氏の家督争いに敗北した後、今度は越前へ侵攻しようとしていた織田信長と手を結びます。天下統一に向けて信長がこの後のぼり詰めていくことを考えると、この時点で信長について昌経には先見の明があったと言えるでしょう。昌経は天正9(1581)年3月に病死するまで、信長のもとで若狭衆の筆頭格としての地位を保ち続けています。

その後、將軍義昭を都から追い払った信長は、8月に浅井・朝倉氏への攻撃を再開し、朝倉氏を討伐。昌経は信長の家臣である丹羽長秀のもとに入り、天正3(1575)年には、越前一向一揆討伐にも参加しました。

天正9(1581)年、昌経は若狭衆の筆頭となり、3000石の加増を受けますが、その年、昌経は病死。跡継ぎがなかったため、結局、領地は信長に没収され、武田元明や丹羽長秀の家臣に与えられました。昌経が築城した高浜城は、丹羽の家臣溝口秀勝が城主となって以降、山内一豊、木下利房、**京極高次**の家臣へと城主が転々と替わり、**酒井忠勝**が小浜城主になった年に廃城となっています。

※謀反…家臣が主君に対して企てる叛乱。

※上洛…地方から京都へ上ること。

※惣領家…本家。

check for 逸見 昌経



『戦乱の高浜城主 逸見昌経展 一郷土の中世と逸見一族』
高浜町郷土資料館

大森宏『戦国の若狭 一人と城一』
『若狭和田郷土誌』和田文化推進協議会
『高浜町誌』高浜町

太田牛一『現代語訳 信長公記 新訂版』(中川太古訳) 新人物往来社
『福井県史』通史編2中世 福井県



永禄9(1566)年、昌経が佐分利石山城主の武藤友益を攻めた際、友益は先回りして手薄となっていた高浜城を攻撃しました。すると、漁民、商人、百姓ら領民が友益勢を撃退。帰陣した昌経はこれを喜び、領民の地代を将来にわたって免除し、これが明治維新まで続いたといえます。また、その恩賞として与えたという薙刀が高浜町の塩土区に伝わります。

あさ くら よし かげ
朝倉 義景



1533年～1573年

越前の戦国大名朝倉氏最後の当主。
京風文化の花開く一乗谷に足利義昭を迎え、
その後、織田信長と対立して敗退。
一乗谷は焼討ちされ、義景は大野で自刃。



16歳で戦国大名朝倉氏の第5代当主に

義景は幼名を長夜叉ながやしやといい、守護大名朝倉氏の第4代当主孝景の子として生まれました。母は、若狭武田氏の娘とされ、後に光徳院(広徳院)を名乗ります。孝景が41歳にしてようやく授かった跡継ぎ誕生に、城下町をあげて喜びに沸いたことは想像に難くありません。7歳になった長夜叉の「帯直しの祝い」には、都の將軍直屬の家臣が太

刀や馬を贈り、敬意を表しています。

文武にも政治にも秀でた孝景のもとで、すくすくと成長した長夜叉は、やがて元服し、延景のぶかげと改名します。しかし、それからほんなく父が急死したため、16歳で家督を相続。4年後、將軍足利義輝から「義」の字を賜り、名を義景と改め、名譽ある官職に任じられました。

episode
1

文武両道の城主と、都に劣らない文化都市「一乗谷」

守護大名朝倉氏の第5代当主となった義景は、越前に根づいた朝倉氏初代の広景から数えると11代目にあたります。一族を率い、国取りの嵐吹き荒れる中で越前を守るのは、まだ若い当主にとって重い責務です。都の將軍家や公家たちとの関係や、長く続く一向一揆との戦いなどには、老練な家臣の手腕に頼るところも大きく、一族きつての名将といわれた朝倉宗滴そうてつが、経験の浅い義景を補佐します。義景は、宗滴が亡くなるまで6年間にわたり、その助言をすべて聞き入れ、善政を行ったと伝わります。

しかし、宗滴が亡くなると、その様子が少しずつ変わってきました。そのあたりのことを、現代の歴史解説書『越前朝倉一

族』では、次のように分析しています。

晩年の宗滴はまさにカリスマ的存在となった。それだけに宗滴の死は朝倉氏にとっては大きな打撃であり、その後の朝倉氏の領国支配にも暗いかげりを見せてきた。(中略)

永祿四年四月六日、坂井郡桑庄大窪ノ浜(福井市三里浜)において大規模な犬追物が興行されたが、これは弘治元年(一五五五)九月に朝倉教景(宗滴)が死没して、強力な補佐を失った義景がみずからの武威を国内に示すことも、その背景にあった。(中略)

翌五年七月初旬に大覚寺義俊が越前に下向してきた。旅泊

(県内) 福井市 敦賀市 大野市



足利義昭の一乗谷入りから始まる朝倉氏滅亡への秒読み

の寂しさを慰めるため、義景は八月二十一日に一乗脇坂尾、すなわち安波賀河原において盛大な曲水の宴を張った。そして、義俊など京都からの文化人を始め、朝倉義景やその一族・家臣達は、和歌や漢詩を詠じて優雅な一日を過ごした。

《松原信之著『越前朝倉一族』第8章より》

朝倉氏に代々受け継がれた文化を好む気風は、孝景、そして、

永祿8（1565）年、父の時代に親密な関係を築いた将軍

足利義輝が三好氏らにより殺害されると、義景は大覚寺義俊と協力して、義輝の弟（後の足利義昭）が近江へ逃れる手助けをします。その後、義輝の弟は名を義秋と改め、朝倉氏を頼って敦賀に身を寄せ、永祿10年（1567）年、一乗谷に移ります。そして、義秋を將軍にするために、上洛軍（都を制圧するための軍）を出すよう要請します。しかし、義景は盛大な歌会や宴を催して義秋をもてなすばかりで、上洛にはいっこうに腰を上げませんでした。二人の胸には思いの食い違いがあったようです。観桜の歌会での二人の和歌は、それを象徴するかのようになり、美しい糸桜を単に詠み込むだけではない内容になっています。

もろ共に月も忘るな糸桜 年の緒長き契りと思わば 義秋

君が代のときにあひあふ糸桜

いともかしこきけふのこの葉 義景

義秋の歌は、この時点では朝倉家や義景の気持ち、何とか

義景の時代に絶頂期を迎えます。茶の湯を楽しむ、優れた茶道具なども収集しました。一乗谷の発掘調査では、当時とても高価な輸入品の陶磁器が出土しているほか、16世紀中頃のペネチア（イタリア）で製作されたガラス片も見つかっています。貿易も盛んに行われていたのです。

つなぎ止めておきたいという思いが、にじみ出たような歌であった。

それに対し義景の歌は、義秋を迎え、こうして観桜の会を催したことを手放して悦んでいるような歌であった。

《夢野大志著『一乗谷残照』より》

観桜の歌会からしばらくして、義秋は一乗谷で元服して名を義昭と改め、義景は贅を尽くしてその式典を執り行いました。しかし、義昭は上洛する気配のない義景を見限り、織田信長を頼って越前を去ります。そして、義昭が室町幕府15代將軍に就くと、信長は義景に謀反の意があるとして、朝倉を攻撃。3年3ヶ月にわたる戦いの末、ついに天正元（1573）年、義景は大敗し、大野へ逃れて自刃。41歳の生涯を閉じました。一乗谷は戦火に焼かれ、戦国大名朝倉氏による越前支配の時代が終りを告げました。

check for 朝倉 義景



松原信之『越前朝倉一族』新人物往来社
『戦国人物伝 朝倉義景』（加来耕三監修・早川大介画）福井県・ポプラ社
『一乗谷・荒涼なる夏』（西ゆうじ作・長尾朋寿画）福井県
夢野大志『一乗谷残照』文芸社
藤居正規『朝倉始末記』勉誠社
『越前・朝倉氏関係年表』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
『福井県史』通史編2中世 福井県
『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



一乗谷朝倉氏遺跡は、278ヘクタールの広大な範囲が国の特別史跡となっており、全国でも珍しい戦国城下町遺跡。発掘調査によって、遺構をはじめ、戦国時代の暮らしをうかがわせる貴重な資料が今も次々と出土しています。

明智光秀



1528年?~1582年

土岐一族出身の武将。
軍記物語では朝倉義景に仕えたとされ
その後、織田信長の家臣になる。
本能寺の変で信長を自害に追い込む。

どんな子だった?



越前国で暮らした若き日々

光秀の出自は諸説あり、江戸中期に書かれた『明智軍記』では、享祿元(1528)年、美濃国の明智城(岐阜県可児市)主の子として誕生したとされます。また、伝承では、父が亡くなると幼い光秀と母は、叔母のいる若狭国小浜の西福庵に身を寄せたともいわれます。その後、都に出てから、元服後に美濃の斎藤道三に仕えますが、長

良川の戦いで道三が息子義龍に討たれ、光秀は越前へ逃れたとされます。

前半生は謎が多いとされる光秀ですが、史料として信頼性の高い『遊行三十一祖京畿御修業記』[※]によって越前で過ごしたことは間違いないと見られています。

episode
1

松尾芭蕉が俳句に詠んだ夫婦愛

『明智軍記』の記述では、弘治2(1556)年頃、光秀は妻の熙子^{ひろこ}とともに峠を越えて越前に逃れ、称念寺(坂井市丸岡町長崎)にたどり着いたとされています。伝承によると称念寺は、光秀が子どもの頃、母と身を寄せた小浜の西福庵の本寺にあたると思われます。

越前で暮らし始めた光秀は、やがて門前に寺子屋を開き、称念寺の推挙で、越前国主の朝倉義景^{あさくらよしかげ}に仕官したと伝わり、鉄砲術をはじめ連歌や故実にも通じた光秀は、一目置かれる存在になったといえます。

この頃の光秀夫婦にまつわる話が称念寺に伝わっています。光秀の家で連歌の会を営んだ時のこと、妻の熙子は客をもてな

す費用がないなかで、夫に恥をかかせないために、自分の美しい黒髪を売って費用を工面し、宴を成功させました。熙子の内助の功を讃える美談は語り継がれ、100年ほど後には、松尾芭蕉がこのエピソードをモチーフに俳句を詠んでいます。

月さびよ明智が妻の咄せむ

(閑静な趣の月夜であることよ 明智の妻の話をしよう)

芭蕉が伊勢を訪れた際、貧しいながらも心を尽くして接待してくれた友人夫妻に、謝意を込めて詠んだものです。北陸の旅路で耳にしたのか、熙子のエピソードは芭蕉の心に深く残って



(県内) 福井市 小浜市
(県外) 滋賀県大津市 京都府亀岡市
岐阜県

代々語り継がれ、敬われてきた「あけつつあま」

永禄11（1568）年、朝倉氏の支援を求めて一乗谷にいた將軍足利義昭が、頼る相手を信長に鞍替^{くらがひ}えして一乗谷を去ると、光秀もまた義景のもとを離れます。以降、信長の出陣に従い、ほぼ連戦連勝の功を立て、近江国（滋賀県）坂本城と丹波国（京都府）亀山城の2つの城をもつまでに出世します。

天正10（1582）年6月2日、光秀は、下克上の横行する戦国時代最大の謀反^{ひんぼん}といわれる事件を起こします。世にいう本能寺の変です。信長の滞在する京の本能寺を光秀が襲撃し、信長を自刃に追い込んだのです。

ところが本能寺の変からわずか10日余りで、光秀は55歳（没年齢は諸説あり）の生涯を終えることとなります。山崎の戦いで羽柴（豊臣）秀吉の軍勢に敗北して逃走する際、落人狩りに討たれたとも、自害したとも伝わります。なぜ光秀が謀反に至ったのか、その理由は謎に包まれ、小説やドラマなどでは、諸説を題材に様々な脚色で描かれています。

主君を討った謀反人として語られることの多い光秀。しかし、その素顔は、心優しく領民に敬愛されたことを物語るエピソードが、城主をしていた亀山や坂本、そして、10年間を過ごした福井に残っています。

福井市東大味^{ひがしおおみ}には、光秀が義景に仕えた一乗谷時代の住まい跡と伝わる地があります。天正3（1575）年、信長軍の柴田勝家^{しばたかつか}らが一向一揆を制圧する際、一揆勢ではない村も焼き払うなか、光秀は東大味を守るため、柴田勝家らに安堵状^{あんんどじょう}を出させています。

臨時非分之族申懸輩在之者可令告来、速可成敗候、

《福井県史「柴田勝家判物」より一部分》

（意訳）突発的に理不尽なことを要求する者があれば通報しなさい。速やかにその者を成敗する。

東大味はこの安堵状で助かり、村人はかつて「あけつつあま」と呼び慕った光秀に感謝し、後に木像を作って霊を慰めました。その光秀像は400年以上、東大味の3軒の家によって大切に守り継がれ、現在、住まい跡の一角に祀られる明智神社に鎮座しています。そして今も光秀の命日6月13日には、毎年、村の恩人である「あけつつあま」の遺徳をしのいで、御開帳が行われています。

※『遊行三十一祖京畿御修業記』：天正6（1578）年から天正8（1579）年の2年半にわたり書かれた僧の旅行記。

※連歌：二人以上で和歌の上句と下句を互いに詠み合って続ける形式の歌。

※故実：儀式や行事、作法などの決まりや習わし。

※内助の功：夫の活躍を陰で支える妻の功績。

※足利義昭：室町幕府の最後の將軍となった第15代將軍。

※安堵状：安心して生活できるよう保護することを記した文書等

check for 明智 光秀



浜野卓也『明智光秀一本能寺の変』講談社 火の鳥伝記文庫
『歴史 REAL 明智光秀』洋泉社ムック
柴裕之『図説 明智光秀』戎光祥出版
すぎたとおる著『明智光秀 戦国人物伝』（加来耕三監修）ポプラ社
桜田晋也『明智光秀』学陽書房 人物文庫
高柳光寿『明智光秀』吉川弘文館
中島道子『湖影 明智光秀とその妻熙子』KTC 中央出版



称念寺境内には、芭蕉の「月さびよ」の句の石碑が建てられています。
光秀の娘で後に細川忠興（藤孝の子）の妻となった細川ガラシャ（幼名は玉）は、称念寺で生まれたとも、東大味の屋敷で生まれたともいわれます。

柴田 勝家



1522年?~1583年

織田信長の家臣中、屈指の猛将。
越前一向一揆の討伐後、越前国主となる。
本能寺の変の後豊臣秀吉に敗れ、
お市の方とともに越前北庄城で自刃。

どんな子だった?



越前の国主に出世した中流武士の子

勝家の生まれや幼少期は資料に乏しく、ほとんどわかっていませんが、江戸時代に編纂された尾張藩の地誌『張州府誌』によると、大永2(1522)年、尾張国上社村(愛知県名古屋市中東区)で生まれました。生まれ年については、この他にも2説あり、また、父は柴田勝義ともいわれますが、尾張国に住む中流程度の地主一族の

出身ではないかというのが、現在のところ有力となっています。通称は権六郎とも権六ともいい、長じては尾張の戦国大名であった織田信秀に仕え、尾張の下社村を領していました。信秀が死去すると、信秀の子で信長の弟の信行に仕え、その後、信長の有力な家臣となりました。

episode
1

信長のために命を張って戦った男

織田信秀の死去後、勝家は信秀の息子で、信長の弟の信行に仕えます。兄の信長は「うつけ」(まぬけ)と言われ、家督相続に相応しくないと周囲から考えられていました。勝家は信行を当主とするために信長と戦いますが、結果は負け戦。信長に降伏しますが、信行が再び兄を倒そうとしていることを知った勝家は、信行を見限り、信長につきまします。以降、勝家は信長の家臣として、次第に出世街道を上っていきます。

しばらくの間は信用されていなかったのか、信長軍に加えられることはなく、永禄11(1568)年の足利義昭の上洛戦から、ようやく勝家に光が当たり始めます。その後は、常に先鋒として、真つ先に敵に切り込んで数々の武功を上げ、信長の信

頼を得ていきます。

永禄13(1570)年には、信長勢による越前の朝倉攻撃が始まり、このときの逸話が、江戸時代の歴史書『武家事紀』などに登場する「瓶割り柴田」の武勇伝として残っています。その逸話を『戦国の「いい男」「ダメ男』から紹介しましょう。

長光寺城(滋賀県近江八幡市)に籠城した時、六角方に水路を断たれ、飲み水が少なくなってしまう。それを見越して、六角の使者がやってきた。すると勝家は、銅盤に満々たる水を張って、使者に口をすすがせ、手を洗わせた。

それは、まだまだ水があると見せかけるための演出だった。



(県内) 福井市 敦賀市
(県外) 愛知県 滋賀県

秀吉に攻められ、北庄城で迎えた悲しい結末

使者は首を傾げながらも、事の子細を承禎に報告した。
こちら勝家。三つの壘に残っている水を兵士たちに見せな
ら、
「もはや水はこれまでじゃ。渴して死ぬより、撃つて出よう
ではないか」
と櫓を飛ばして十分に水を飲ませてから皆の前で三つの壘を

天正3（1575）年、越前の一向一揆を滅ぼした信長は、
加賀（石川県）や越後（新潟県）へ睨みを効かすために、勝家に
越前北庄を治めさせます。勝家はそこに北庄城を築城。その規
模は安土城にも劣らない規模の城であったと伝えられます。天
正9（1581）年に北庄を訪れた宣教師ルイス・フロイスは、
著書『日本史』の中で「城や他の屋敷の屋根が全て立派な石で
葺かれており、その色により一層城の美観を増している」と述
べています。また、勝家は城や城下町づくりの他にも、北国街
道の整備、舟橋や半石半木の九十九橋の架橋、領地や商いの権
利を保障する「安堵状」の発給、絹織物や和紙の振興、貿易の
振興など、多岐にわたって精力的に国づくりをしています。
しかし、天正10（1582）年、本能寺の変で信長が亡くな
ると、羽柴秀吉の台頭で対立関係が露になってきます。清洲会
議において、信長の妹お市の方が勝家の妻になることが決まっ
た一方で、信長の後継者は、秀吉が推す三法師に決定。勝家と
秀吉の対立は、信長家臣団を二分する激しい戦いに発展します。
天正11（1583）年、賤ヶ岳の戦いに勝利した秀吉軍は、
勝家が籠城する北庄城を攻撃。勝家はお市に娘を連れて城を出
るよう諭しますが、お市の方は夫と一緒に自害することを選び

割り、決死の覚悟のほどを見せた。
そして翌日、苦戦しながら六角軍を潰走させた。
この功により、三万貫を加増され、「壘割り柴田」の異名を轟
かせた。

《中島道子著『戦国の「いい男」「ダメ男」』より》

ます。そして、秀吉へ手紙を書き、娘のお茶々、お初、お江
（浅井長政との間の子）を託し、3姉妹を城の外へ逃がしまし
た。秀吉軍に城を包囲された2日後、勝家は城に火をかけ、お
市の方とともに天守閣で自害。64歳の生涯を閉じました。

「勝家とお市の方 辞世の句」

さらぬだにうちぬる程もなつの夜の

わかれをさそうほとゝぎすかな 小谷のお方

（歌意）時鳥はあの世からの鳥というけれど、そうでなくても寝
ているはずの夏の夜に、私たち夫婦の別れを告げている
ようだ。

夏の夜のゆめぢはかなき跡の名を

雲井にあげよやまほととぎす 勝家

（歌意）夏の世の夢のようににはかない我らの人生ではあったが、
時鳥よ、せめて名だけでも大空に連れていってくれ。

※ルイス・フロイス：織田信長と親交が深く、日本各地でキリスト教を布教
したポルトガル人宣教師。
※籠城：城にこもって敵を防ぐこと。

check for 柴田 勝家



森下翠『柴田勝家』学陽書房
中島道子『戦国の「いい男」「ダメ男」』PHP研究所
太田牛一『現代語訳 信長公記』（中川太古翻訳）新人物往来社
『完訳フロイス日本史①②③』（松田毅一・川崎桃太翻訳）中央公論新社
『柴田勝家』福井市立郷土歴史博物館
『越前・朝倉氏関係年表』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
『福井県史』通史編2中世 福井県
『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』福井県立こども歴史文化館



勝家の北庄城は文献や伝承のみ伝わり、長く幻の城とされてきましたが、平成の時代になって発掘調査で初めて存在が確認されました。見つかった遺構の一部を「北の庄城址・柴田公園」（福井市中央）で見ることができます。

お市いちの方かた



1547年?~1583年

兄の織田信長により浅井長政と政略結婚。
浅井が信長に討たれた際
三人の娘とともに小谷城を逃れる。
柴田勝家の妻となり、最期は越前北庄城で自刃。

どんな子だった?



美少女で名高い、信長の妹

お市の方は、戦国時代きつての美人として、また、悲劇のヒロインとしても知られ、波乱の生涯は、様々な物語に取り上げられてきました。父は尾張国の武將で信長の父でもある織田信秀、母はその正室か側室という通説のほかに、信長の叔父か従兄弟の娘という説もあり、出生から結婚までのことは不明な点が多い女性です。お市の方の「方」は、

身分の高い人物につける敬称で、市、市姫、浅井長政に嫁いでからは小谷の方とも呼ばれました。

実は、お市の方は越前と若狭の国に深いつながりを持っています。織田家の先祖が越前であるという説があり、またお市の方が越前で亡くなった後も、娘や孫にも大きく関わっていくのでした。

episode
1

運命に抗うすべもなく、浅井長政と政略結婚

織田家のルーツは、越前国織田庄（越前町織田）にある劔神社の神官といわれ、その後、室町幕府の有力者、斯波氏の家臣として尾張の守護代を務めたのが、尾張国織田家の始まりとされます。お市の方の運命は、このルーツに引き寄せられるかのよう、越前との因縁を深めていきます。

江戸時代初期に書かれた信長の一代記『信長公記』によると、永禄10（1567）年、信長は、近江国（滋賀県）の浅井長政と手を結ぶために、お市の方を信長の娘として嫁がせました。このとき、浅井が越前の朝倉と同盟関係にあったため、朝倉とは戦わないという約束を交わしています。

『江 浅井三姉妹の生涯と戦国』では長政とお市の方の結婚に

ついて、次のように述べています。

一般に戦国時代の領主の子女は戦争が起きれば、逃げ惑い、政略の駒とされてきました。一面で性交渉を伴う外交官的性質も持つており、人質としての面と併せて平和維持のために派遣される親善大使の役割を担い、一たび戦争が起きれば、彼女等は実家に帰されるのが慣わしでした。（中略）

長政は性格も穏やかで二人の仲は睦まじく、子宝にも恵まれた幸せな結婚生活だったといえます。

《坂本優二著『江 浅井三姉妹の生涯と戦国』より》



(県内) 福井市
(県外) 愛知県 滋賀県

織田家ルーツの地、越前へ、そして…

しかし、元亀元（1570）年、信長が越前の朝倉攻めを開始し、朝倉が治めていた敦賀に侵攻。長政は苦しい立場に立たされ、ついに信長を裏切り、朝倉につくことを決断します。この金ヶ崎の戦いで、長政の寝返りをいち早く信長に知らせたのが、お市の方であったという逸話があります。その信憑性は定かではなく、後世の創作かともいわれますが、戦国時代を舞台にしたドラマなどでよく登場する話となっています。要約すると次のような内容です。

信長軍は敦賀の天筒山城、金ヶ崎城を次々と陥落させ、さらに近江の国境に近い疋壇城も開城。ところがそのとき、長政の妻お市の方から信長のもとに陣中見舞いが届けられます。それ

は、小豆の入った小さな袋。信長は、袋の両端があえて縛られていることから、長政が敵となったことを悟ります。お市の方は、信長軍が前も後も敵に挟まれた「袋のねずみ」であることを、その小さな袋に託して知らせたのでした。

戦況の不利は必至と考えた信長は急きよ撤退。浅井の領地を避けて若狭から湖西を通り、京へ戻りました。

それから3ヶ月余りして、長政は姉川の合戦で信長に敗北し、小谷城で3年余り籠城しますが、ついに城は陥落、長政は自刃。

お市の方と3人の娘、お茶々、お初、お江は城から救出され、織田家に戻ります。

本能寺の変で信長が亡くなった天正10（1582）年、お市の方は、柴田勝家と再婚し、3人の娘とともに越前の北庄城にやってきました。ところが、羽柴秀吉と勝家が敵対。賤ヶ岳の戦いで勝家に勝利した秀吉軍は、北庄城まで攻め込んできました。勝家とお市の方は、天正11（1583）年、ついに燃えさかる天守閣で自刃して果てます。

戦国乱世にほんろうされ、30歳代半ばの人生を終えたお市の方。その生涯は、信長の越前攻めに起因する長政との別れ、そして、越前の地に嫁ぎ、最期を遂げるという、織田家祖先の地とされる越前と縁の深いものでした。さらに不思議なことに、その縁は、お市の方が亡くなった後も続きます。

落城の際、秀吉に託され城を出された3人の娘は、以降、秀吉の元で成長します。次女のお初は京極高次に嫁ぎ、高次は関ヶ原の合戦後、小浜城主（小浜市）となります。しかし、子ども

に恵まれず、高次は早くに亡くなります。また、三女のお江と将軍秀忠の娘の勝姫は、従兄にあたる福井藩第2代藩主の松平忠直に嫁いで越前に入ります。忠直は松平（結城）秀康の子で徳川家康の孫ですが、後に豊後国に配流となりました。お市の方を含め3代にわたって福井にきた織田家の血筋を持つ女性たち。しかし、ルーツの地は、彼女たちに厳しい試練を与える地であったようです。

check for お市の方



坂本優二『江 浅井三姉妹の生涯と戦国』河出書房新社
永井路子『流星—お市の方（上下）』文藝春秋
舟橋聖一『お市御寮人』講談社
鈴木輝一郎『お市の方 戦国の凰』河出書房新社
中島道子『それからのお市の方—北ノ庄落城異聞』新人物往来社
中島道子『戦国の「いい男」「ダメ男」』PHP研究所
『柴田勝家』福井市立郷土歴史博物館
『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



お市の方が実は北庄城を逃れて、三国の寺に隠れ住んだという伝承があります。また、三重県にも伝承があり、そうした生存説について、中島道子著『それからのお市の方—北ノ庄落城異聞』が歴史小説として詳しく語っています。

金森 長近



1524年～1608年

戦国時代の**大野城主**。後に**高山城主**。
織田信長、**豊臣秀吉**、**徳川家康**に仕える。
一向一揆鎮圧の功で信長から大野を拝領し
大野城を築き、**城下町**を整備。

どんな子だった？



8歳の織田信長の世話係からスタート

長近は、幼名を可近ありちかといい、大永4（1524）年、大畑定近ちかの二男として、美濃国多治見みののくにたじみ（岐阜県多治見市）で生まれました。金森の姓は、近江国野洲郡金ヶ森ちかみののこやすくんのががもり（滋賀県守山市金森町）に父と移り住んだことから、その名を付けたとされます。天文10（1541）年、18歳の時、長近は織田家に仕え、当

時8歳であった信長の世話係となります。以降、信長が本能寺の変で亡くなるまで家臣として数々の戦いに赴き、弘治元（1555）年には、今川義元との合戦で手柄をたて、信長の「長」の字をもらい、名を長近と改めました。

episode
1

戦で武功をあげて出世、大野の亀山城主に

長近は、信長、秀吉、家康という天下の覇者に仕え、一代で大名にまで出世した武将です。そうした長近が最初に城をもつことができたのが大野でした。

天正元（1573）年、朝倉義景あさくらよしかげを当主とする一乗谷朝倉氏を滅ぼした織田信長は、次に越前国の一向一揆を鎮圧。長近は、その恩賞として、天正3（1575）年、大野郡の3分の2を与えられ、12年間、領主として大野の治世にあたりました。

大野に入った長近は、まず大野盆地の亀山に城を築き、そのふもとに城下町を整備しました。城は江戸時代に焼失した後、再建されますが、明治時代の廃藩後に取り壊されました。現在の天守閣は、昭和43（1968）年に再建されたものです。一

方、長近が整備した城下町は、規則正しく配置された町割が今も残っています。長近のまちづくりは、400年後の現在も通用する都市計画といわれ、その特徴として次の3つがあげられます。

- ① 南北六条、東西六条の区画の長方形に区切られた東限に寺町通りをつくった。
- ② 町の通路に三尺幅の水路を流し、上水道・下水道の生活用と消火、消雪の機能を持たせた。
- ③ 道幅は設計当初から現代にいたるまで、特に拡張の必要もなく使われている。



（県内）大野市
（県外）岐阜県多治見市・高山市・美濃市・関市 滋賀県守山市

信長の時代から苦楽をともにした家康と長近

《大野市文化財保護委員会出版部編『越前大野城と金森長近』より要約》

長近のまちづくりは、人々が住みやすく、また、美濃街道を利用した商業振興と防衛面にも配慮されたものでした。

慶長5（1600）年、関ヶ原の合戦では家康側の東軍として参加し、その恩賞に美濃国上有知（美濃市と関市の一部）と河内国金田（堺市の一部）を与えられました。小説『不殺の軍扇 金森長近』の中には、情に厚い長近の人柄にも触れながら、家康との親しい関係が描かれています。

戦況が決定的となると家康は、金森素玄の両手を握って言った。

「ありがとうござった。法印どの」

笑顔で黙してうなずくだけの素玄長近であった。

「金森どのの配下、忍びの者どもの活躍ぶり、今回も、つくづく感じ入った。ありがとうござった」

くり返えし言葉にして、握る手は、汗ばみ力強かった。金森法印素玄長近の握りかえす力も強かった。

東軍の幕下で、家康配下で闘い続けた若大将たちは、金森素玄に対する家康の言動を、極めて不審に思う。金森という老武将と家康の関係が、なんとも理解できかねるのである。天下を風靡する家康が、年輩とはいえ、とるにたらぬ山国飛驒高山の小さな城持ち武将に対するその丁寧な振舞いは、異状に映ったにちがいない。そんなふん囲気を感じとった家康は、更に言葉

を継いで、周囲に語り聞かせようと、声を強めるのである。

その後、長近は秀吉の時代に飛驒高山に移りますが、そこでも大野と似た町割の城下町を建設しました。長近による2つの町は、ともに京都のような町割や情緒ある町並みを今も残し、「北陸の小京都大野」、「飛驒の小京都高山」とも呼ばれます。

「在りし日の織田家で、金森殿が五郎八五郎八と呼ばれておいでのごころ、この家康は竹千代でござったな。まだこの家康も六つでござった。人質の厳しい中で金森殿にはひとしお懇ろにしてもらった。お福も可愛いがってもらった。残念でござったな長則どのの討死は……、その分可重どのご活躍は、家康も感じ入っておりますぞ」

「そうでござった。お福も長近には過ぎた女性でござった」

少々顔を赤らめて五十年も昔を想う素玄は七十七才になっていた。（中略）

二人の、陣中での会話によって、東軍の旗本の中で訝る者たちにも、家康と長近、素玄と家康の間柄が五十年もの長い昵懇であったことを知るのであった。

《桐谷忠夫著『不殺の軍扇 金森長近』より》

長近は戦に強いだけでなく、時流を見極めて乱世を生き抜き、人生の勝利をつかんだ武将と言えます。しかし、決して冷酷ではなく、長近は戦いで亡くなった者の霊を敵味方なく慰める法要を営み、また、一向一揆との戦いの後には、宗派を変えた村への罰を免除するなど、戦後処理としても慈悲深い措置をした人物でした。

check for

金森 長近



『越前大野城と金森長近』大野市
『大野のあゆみ 改訂版』大野市
『大野の宝 先人に学ぶ』大野のあゆみ編集委員会
桐谷忠夫『不殺の軍扇 金森長近』叢文社
市原三三『金森長近公略伝 その生涯と美濃市』美濃金森長近公顕彰会
『福井県史』通史編3近世一 福井県
『図説福井県史』福井県



長近は千利休や古田織部に茶の湯を習い、京都や伏見の屋敷に茶室を造るほどの茶人でした。また、子（養子）の可重も茶道に秀でた人物で、將軍秀忠の指南役を務め、さらに長近の孫の重近は武士を捨てて茶道を極め、「宗和」と名乗って宗和流の茶道を開きました。

ほん だ ほん だ しげ つぐ
本多 重次
(本多 作左衛門)

1529年～1596年

「**鬼作左**」の異名をもつ**勇猛な武将**。
家康の信頼厚く、**秀康**(後の福井藩主)を預かる。
「**一筆啓上**」から始まる手紙でも知られ
手紙中の「**お仙**」は息子で後の**本多成重**。

どんな子だった?



幼い頃から**松平家に仕え、強さと柔軟さをあわせもつ武将に成長**

重次は、三河国みかわくにの松平(後の徳川家)に仕える本多重正の次男として生まれ、幼い頃は八蔵といいました。八蔵は、数え年7歳から松平の家臣になり、清康、広忠、家康の三代にわたって仕えました。豪傑で頑固者として知られ「鬼作左」の異名をもつ重次ですが、実はものごと柔軟に対処する側面もある人物でした。三河の奉行

になった重次は、法を守らない者を徹底的に取り締まる一方で、あまりにも多すぎる法令を整理し、町の辻々にある法令が書かれた立て札を、全て読みやすい仮名書きにします。そこには、相手を思いやって柔軟に最善の方法を考えると、重次の性格がうかがえます。

episode
1

「**一筆啓上火の用心 お仙泣かすな(瘦さすな) 馬肥やせ**」

重次が7歳の時、初めて仕えた松平清康が謀反によって殺され、その後は、清康の子の広忠、そして、広忠の子の竹千代(後の徳川家康)の三代に仕え、数々の戦で勇猛に戦います。元龜3(1572)年の三方ヶ原の戦いでは、全身に傷を負いながら、家康に群がる敵に切り込んで家康を救出したと伝わります。敵を恐れず、勇猛果敢に戦う重次は、当時の通称が「作左衛門」であったことから「鬼作左」と異名をとるようになります。そうした戦いの一つ、天正3(1575)年の長篠の合戦の際、重次は陣中から妻に手紙を送ります。

一筆啓上火の用心 お仙泣かすな(瘦さすな) 馬肥やせ

(意識)簡単に申し上げます。火事にならないよう注意し、息子をしっかりと養育し、馬をしっかりと肥育しなさい」

※江戸時代に書かれた『岩淵夜話』には「泣かすな」、明治時代の『三百諸侯』には「泣かすな」ではなく「瘦さすな」とされています。

この手紙は、たった一行で明確に用件を伝える名文として、有名になりましたが、それだけでなく「鬼作左」と呼ばれる荒々しい武将とは異なる人間像もうかがわせています。妻に対して「啓上」を用いる優しい夫であり、戦場で家のことを気遣う当主であり、また、「お仙」(重次の息子・後の初代丸岡城主本多



(県内) 福井市 坂井市 越前市
(県外) 愛知県

ときには家康を叱り、諭す兄のような家臣

成重なるしげを思う父親でもあった重次。そうした重次の人柄を『本多作左衛門「信念」を貫く男の生き方』では、次のように描いています。

負けても勝っても帰ってきたときに、本多作左衛門は泥まみれ、血まみれのまま、馬を走らせ城下町をひとまわりする。大声で怒鳴る。「家にいる、かか（女房）や子供たちよ、歩けるのならとしよりたちも外へ出てこい。おまえたちの亭主が戻ってきた。温かく迎えてやれ！」

そう告げる。たちまち家のなかからバラバラと家人がとび出

家康に関する物語や伝記には、重次がどれだけ家康を大切に思い、どのように忠誠を尽くしたかを記したのも少なくありません。父親を早くに亡くした家康にとって、10歳ほど年長の重次は、兄のように頼りがいのある人物であったようです。家康が大坂の豊臣秀吉に参上した際には、人質として秀吉から差し出された実母の部屋の周囲に薪を積み上げ、いつでも火をつけられるよう準備し、大坂にいる家康を守るために秀吉を牽制します。

また、間違ったことには間違っていると言う剛直な気質の重次は、家康に対して苦言を呈したり、意見することもありました。家康が重い病に罹ったとき、重次は治療を受けるよう何度も諭しますが、医者嫌いの家康は治療を受けず「もう死ぬから若い者を頼む」と言うばかり。そんな家康に対して重次は「度重なる戦で片目が潰れ、指を切り落とし、足も不自由になった自分が先に死んで、あの世への道掃除をしておく」と言い残し

してくる。そして、疲れて戻ってくる自分の亭主や息子をみつけると、走り寄って、「よかった、よかった」

と、その腕をさする。そんなとき、本多作左衛門は町の片隅に立って、家族再会の涙にくれる光景をじっと眺めている。そして、その本多作左衛門の目にも、大粒の涙が溢れこぼり落ちていた。

そんなことを知っているから、本多作左衛門がいくら短気を起こし怒鳴っても、町の人びとは作左衛門を慕った。

《童門冬二著『本多作左衛門「信念」を貫く男の生き方』より》

て部屋を出てしまいます。重次なら本当に自害しかねないと思っただ家康は、ようやく医者の治療を受けたといえます。

家康の正室に仕える奥女中が家康の子を身ごもった際には、重次が引き取って面倒をみました。そして、生まれた子が、後に初代福井藩主となった結城秀康ゆうきひでやす。秀康は関ヶ原の戦いの功績によって、越前に67万石を与えられます。重次は関ヶ原の戦いより前に亡くなっていますが、関ヶ原以降、重次ゆかりの人々は、越前と深い縁で結ばれていきます。甥の本多富正ほんだとみまさは、秀康の越前入りに従い、府中城主（越前市）になります。また、重次の息子お仙（成重）は丸岡城主（坂井市丸岡町）になり、府中と丸岡の本多は、主君の秀康を補佐して越前の統治に尽くし、江戸幕府からは大名扱いで厚遇されます。

※大坂：明治維新以前の大坂の名称。

check for 本多 重次



童門冬二『本多作左衛門「信念」を貫く男の生き方』PHP研究所
横山茂『一筆啓上 家康と鬼の本多作左衛門』郁朋社
戸川残花『三百諸侯』（桑田忠親監修）新人物往來社
『本多成重と丸岡藩』みくに龍翔館
『これき人物シリーズ4 ふくいの先人たち 古代・中世』

福井県立こども歴史文化館



お仙（成重）が城主となった丸岡城（築城は柴田勝豊）の一角には、重次の「一筆啓上」の碑が建立されています。ちなみに丸岡城の天守閣は、現存する全国の天守閣の中で最も古い建築様式を残しています（国の重要文化財）。

おおたに よし つぐ
大谷吉継



1565年?~1600年

病に冒されながらも
白い頭巾を被り、主君**秀吉**のために活躍。
石田三成との固い友情に結ばれ
関ヶ原の戦いに命を散らした**敦賀城主**。

どんな子だった?



秀吉の小姓を務めた頭脳明晰な美少年

吉継の誕生は、永祿2(1559)年と永祿8(1565)年の2説があり、場所も近江国(滋賀県)か豊後(大分県)の2説があります。母親は豊臣秀吉の正室に仕える東という名の侍女、父親については諸説あります。

子どもの頃は、石田三成とともに秀吉の小姓を務め、とても可愛が

られたといえます。小姓は主君の近くに仕え、何かあれば主君を守る役目を持ち、成長すると主君から最も信頼される側近になります。吉継はその後の活躍からみて、相当な頭脳を備えていたようです。しかし、成長してからは、皮膚がただれて崩れる重い病気を患い、そのため白い頭巾を被っていたとされます。

episode
1

らんせ
乱世に咲いた友情の花

10代で秀吉に才能を認められ、ともに有能な家臣に成長した大谷吉継と石田三成。秀吉が主催した回し飲みの茶会で病気の吉継の後を皆が嫌がる中、三成が茶を飲み干したという出来事があり、二人が友情をさらに深めたというエピソードが近代の作家の作品に紹介され、広く知られました。茶を飲んだのは秀吉とする作品もあり、それぞれ確かな史料はないのですが、心温まるお話です。

もうひとつ、三成と吉継の友情を感じることができる出来事がありました。天正15(1587)年、九州に遠征中の秀吉に吉継は謹慎を命じられたことがありました。理由はわかりませんが、三成は博多の豪商神屋宗堪に頼んで吉継を博多の寺に案内

し、茶器などをみせて慰めたことが神屋宗堪の日記に書かれています。三成の心遣いに吉継の落ち込みも少し軽くなったかもしれません。

慶長3(1598)年、秀吉が亡くなると、徳川家康が天下取りに向けて動き出します。そうした中、吉継は三成から意外な計画を打ち明けられます。それは家康を倒すという話でした。吉継は、勝ち目のない戦いを止めるように説得しましたが、三成がそれに応じることはありませんでした。最後にはその熱意にうたれ、ともに戦う決意をします。そして、戦を有利に転じるために、吉継は武将たちを様々な智策で取り込んでいきました。しかし、命運はついに尽き、やがて悲劇的な結末を迎えることとなります。

(県内) 敦賀市
(県外) 滋賀県不破郡関ヶ原町



関ヶ原の戦いで、友情を貫いて散った命

慶長5（1600）年9月15日の朝、関ヶ原を舞台に激しい戦いが始まり、昼を過ぎた頃、小早川秀秋が家康側の東軍に寝返り、吉継の軍を攻撃。裏切りを予想して吉継が配置していた軍までもが、東軍に寝返っていききました。吉継の軍は、敵に囲まれて攻撃を受け、壊滅状態となります。司馬遼太郎の小説『関ヶ原』の中では、吉継の最期の様子がドラマチックに描かれています。

「金子を、残らず出せ」

吉継は、命じた。戦場での軍用金は小人頭が保管している。それを掛硯からとりだすと、吉継は自分の身辺を護ってきた士卒にのこらずくばり、

「敗軍ときまつた以上、一軍こぞつて討死したところぞなんの益もない。落ちよ。この金銀をば、道中の費用にせよ」

と、どなりつけるようにして追い散らし、そのあと湯浅五助をまねき、介錯を命じた。

「わが首を、敵に渡すな」

病いに蝕まれた首を、敵将の首実検に供することは吉継としては堪えられない。（中略）

吉継は大あぐらをかき、腹のあたりをくつろげ、背後にまわった五助が刀を抜かぬまに吉継はすばやく腹を掻き切ってしまった。その首を五助は丁とおとし、陣羽織でつつみ、馬に飛び乗るや、戦場を西へ駆け、谷川のあたりまでくると、すでに敵の影が遠い。五助は安堵して馬から降りた。

《司馬遼太郎著『関ヶ原』より》

吉継は関ヶ原の戦いの中で、家臣であり友でもある平塚為広から届いた別れの歌への返歌を残しており、これが吉継の辞世の句とされています。この歌にも、友や家臣をととても大切にしたい吉継の心が見て取れます。

裏切りが相次いだ戦いの中で、最後まで三成を裏切ることなく戦った吉継の生き様は、後の人々に感銘を与え、義に生きた知将として語り継がれました。また、天正17（1589）年に吉継が城主となった敦賀城下でも、優れた領主としての足跡を残しています。吉継は城を中心とした町割を整備し、港を活用した商業の中心地をつくったり、商人や寺へ安堵状などを発給しました。それが後の敦賀の発展へと繋がっていきました。

「吉継 辞世」

契りあらば 六のちまたにしばしまて

おくれ先だつ 事はありとも

（歌意）縁が続くのならば、遅れたり先立つことがあっても、

あの世との境目にある六道の辻で待っていてくれ。

※義：人として守るべき正しい道

※町割：町の建設において定められた区画

※安堵状：所領や権利などを認めるために送った書状

check
for

大谷 吉継



司馬遼太郎『関ヶ原』新潮社
南原幹雄『名将 大谷刑部』角川書店
『炎の仁将 大谷吉継のすべて』新人物往来社
野村敏雄『仁将—小説大谷吉継』PHP研究所
菅靖匡『小説大谷吉継』学研プラス
山元泰生『大谷吉継』学陽書房



関ヶ原の戦いの中には、目が見えなくなり、身体も不自由であったため、輿に乗って参戦したといわれます。

京極 高次



1563年～1609年

織田信長、羽柴秀吉、徳川家康に仕え
関ヶ原の戦いの功で
若狭国小浜城主となる。
妻はお初（お市の方の娘）。

どんな子だった？



信長に差し出された人質として美濃国で育つ

高次は京極高吉と浅井長政の姉の京極マリアの長男として、浅井氏の小谷城（滋賀県長浜市湖北町）で生まれました。幼い頃は、人質として信長のもとへ送られ、美濃国（岐阜県）で少年時代を過ごしています。やがて高次は信長に仕えるようになり、10歳の頃、將軍足利義昭を攻める信長軍に従軍。近江

国奥島（滋賀県近江八幡市）五千石を与えられています。京極氏は室町幕府の創立以来の名門であり、本来なら信長より身分が高い家柄ですが、高次の父の代には衰退し、高次もまた、この後さらに、戦国の世にほんろうされることとなります。

episode
1

オセロゲームのように、敵と味方が何度も反転する中で

天正10（1582）年、高次19歳の頃、明智光秀が信長を討つた本能寺の変が起こります。この時、高次は妹（二説には姉）竜子の夫である若狭の武田元明と組んで光秀に味方し、羽柴秀吉の長浜城（滋賀県長浜市）を攻撃。ところが、光秀は秀吉に討たれ、元明は自害。高次は秀吉に追われる身となりますが、竜子が秀吉の側室になったことで高次は許され、秀吉の家臣になったのでした。小説『風薫る―京極高次と初物語―』は、弟と語り合うシーンでこの時の心情を語らせています。

「一度は謀反したわしをこのように取り立てて下さるのは、側室になられた姉上のお計らいに違いありません。偏に姉上のお陰じゃ」

そう言うとき高次は南の方角に向けて手を合わせた。

「わしはもう二度と過ちはせぬ。お家を再興するためなら羽柴様の手足となつて命を懸けて働き尽くす所存じゃ。高知も協力してくれ。」

高次の声はうわずり目には涙が溢れていた。再び巡ってきたこの機会を逃すまいと、二人は固く手を握り合うのであった。

《野村芳弘著『風薫る―京極高次と初物語―』より》

天正12（1584）年、高次は秀吉から大溝（滋賀県高島市勝野）を与えられて大溝城に入り、父の代からの宿願であった大名への返り咲きを果たします。また、秀吉の命により、お市



（県内）小浜市
（県外）滋賀県高島市・大津市

関ヶ原の戦いの功績が認められ小浜藩主となる

の方の娘お初^{はつ}を妻に迎えました。また、お初の姉茶々^{ちやちや}は、後に秀吉の側室^{そばしむ}となり、秀吉との繋がりを強めた高次は、小田原征伐^{P.48参照}の役に従軍し、大津（滋賀県大津市）6万石を与えられました。

慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いで徳川家康側^{とくがわえんそく}について高次は、大津城に籠城^{かろうじょう}して西軍の猛攻に耐えた功績が認められ、若狭国8万5千石を与えられました。

二十日。家康は大津城に入りそこで七日間滞在した。（中略）

その間家康は大津城内を具に見て回った。三ノ丸の堀は毛利勢によって埋め立てられ、二ノ丸の城門は大砲で悉く破壊されていた。本丸の鉄の城門には数多の砲弾の後や弾痕が打ち込まれており、天守こそ残っていたものの大砲で柱が打ち抜かれたのか、幾分傾いている。その生々しい籠城の跡を見て

「京極殿はここまで我が徳川のために戦ってくれたのか。」

いつもは冷静な家康も流石に戦闘の凄まじさに心が動かされた。さらに毛利勢一万五千が関ヶ原まであと少しの処まで迫っていたことを知ると、改めて大津城での籠城がいかに貴重な戦いであったのかを痛感した。家臣の本多正純も毛利勢のことを知ると

「上様。後半日この城の開城が早ければ、毛利勢一万五千が関ヶ原の戦いに加わっておりまして。」

「もし、毛利元康や勇将立花宗茂が戦いに参加しておつたら、わが方が勝利できたかどうかかわからぬ。」

家康はあの帰趨のわからぬ戦いの様子を思い出し、体を強張らせた。

「ところで京極殿はどちらに落ちられた。」

伐や文祿^{ぶんろく}の役に従軍し、大津（滋賀県大津市）6万石を与えられました。

「木食様の和議^{わぎ}を受け入れ、家臣と共に高野山に向われました。」

「関ヶ原の勝利の真の功労者は京極殿じゃ。すぐに呼び戻すよう手配せよ。」

正純は直ちに高野山に使者を遣わした。

《野村芳弘著「風薫る―京極高次と初物語―」より》

家康から若狭国を与えられた高次は、小浜湾に面し北川と南川に囲まれた雲浜^{うんぴん}で小浜城の築城を開始し、また、城下町の整備を行います。しかし、高次は城の完成を見ることなく、慶長14（1609）年、病のため小浜でその生涯を閉じ、小浜藩は子の忠高^{ただたか}へと引き継がれます。

忠高は大坂冬の陣で義母の常高院^{じょうこういん}（お初）とともに和議の交渉にあたり、その功績により敦賀を増されました。そして、常高院が亡くなった翌年の寛永11（1634）年、忠高は出雲国松江藩へ移り、小浜藩には酒井忠勝^{さかいただかつ}が入り、以降、江戸時代を通して酒井家が藩主を務めます。

※側室^{そばしむ}：高貴な人物の妾^{めかけ}。①正室（正式な妻）。

※籠城^{かろうじょう}：城にこもって敵を防ぐこと。

※和議^{わぎ}：関係を修復するための相談。

check for 京極 高次



野村芳弘『風薫る―京極高次と初物語―』ブイツーソリューション
八木厚夫『若狭の記憶』木耳社
志村有弘『戦国残照 お江とその時代』勉誠出版
伊藤一樹編『常高院と京極の女達』後瀬書房
『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



小田原征伐などの功績によって、秀吉から近江八幡2万8千石や近江大津6万石を与えられた高次ですが、他の大名からは、その出世が竜子やお初、茶々の七光りとされ“女の尻で光る「堂大名」”と陰口をささやかれたともいいます。

お初 はつ

（常高院）
じょうこういん



1568年?~1633年

戦国大名浅井長政とお市の方の次女。
浅井の滅亡後、母の再婚で北庄へ。
後の小浜藩主京極高次に嫁ぎ、
死別後に出家、常高院と号した。

どんな子だった?



戦国乱世に運命をほんろうされた少女時代

初は近江国小谷城主の浅井長政を父に、織田信長の妹お市の方を母に、その次女として小谷城で生まれました。

天正元(1573)年、叔父の信長による浅井攻めで小谷城が陥落し、父は自害、母のお市と3人の娘、お茶々、お初、お江は助け出され、信長に引き取られます。その信長が本能寺の変で亡く

なった後、お市は柴田勝家と再婚し、娘たちも越前国北庄(福井市)に移りますが、翌年、勝家が羽柴秀吉(豊臣秀吉)に敗れ、北庄城は落城。勝家とお市は自害し、三姉妹は秀吉のもとへ送られます。初たち三姉妹は2度の落城を経験し、天下取りの争いに運命を左右される少女時代を過ごしたのでした。

episode
1

初と江の幸せを願う茶々の心と秀吉の思惑

お茶々、お初、お江の三姉妹は、秀吉の思惑によって3本の運命の糸を折々に絡ませながら、それぞれ波瀾の生涯を歩むこととなります。

お初は、天正15(1587)年頃、秀吉が勧める縁談を受け入れ、京極高次に嫁ぎました。溪心院という女性が記した手記『溪心院文』に、この結婚のいきさつに触れる箇所があります。それによると、この時期、秀吉から側室となるよう求められていた姉のお茶々が、まず先に妹たちを嫁がせてやってほしいと頼んだため、秀吉は急いで初を高次へ嫁がせたことなどが記されています。

お初が嫁いでの高次は功績をあげ、秀吉から目をかけら

れるようになります。そこにはお初だけでなく、高次の妹で秀吉の側室となっていた童子の内助の功があったとされ、妻と妹の2人に背中を押されるかのように、高次はますます秀吉の信頼を得ていくのでした。

高次に嫁いだお初は、ようやく落ち着くことのできる場所を得ましたが、三姉妹を巻き込む乱世の嵐は、まだ収まったわけではありませんでした。姉のお茶々は秀吉の側室となり、後に淀君と呼ばれるようになります。妹のお江は秀吉による3度目の政略結婚で徳川秀忠へ嫁ぎ、そして、三姉妹の運命は次なる悲劇へと向かいます。



(県内) 小浜市
(県外) 滋賀県 東京都

豊臣家と徳川家の間で和平交渉に奔走

こうした三姉妹のその後について『江 浅井三姉妹の生涯と戦国』は、次のように述べています。

ここにおいて、三姉妹の真ん中の初にとつては姉の茶々が豊臣家、妹の江が徳川家という、それぞれ天下を二分する巨大勢力にはさまれて、後々までその両者の仲立ちをする運命になるという伏線が敷かれることとなりました。

やがて、秀吉の死後、勢力地図を塗り替えながら、政治的圧迫を強める徳川家と、それに屈せず抗う豊臣両家のぶつかり合いは激しくなっていく、豊臣家の茶々（淀）と徳川家の江は互いの立場から疎遠になり、その間に立つ初（常高院）は講和に奔走することになってゆきました。

《坂本優二著『江 浅井三姉妹の生涯と戦国』より》

関ヶ原の戦いでは、お初の夫の高次が豊臣方から徳川方に転じ、お初は姉のお茶々と敵対する立場になってしまいます。

戦いは徳川方の勝利に終わり、高次は恩賞として若狭国を与えられ、お初は高次とともに小浜に入りますが、幸せな日々は、そう長くは続きませんでした。

慶長14年（1609）年、高次が病により他界。お初は仏門に入り、名を常高院に改めます。さらに辛いことに、姉のお茶々がいる大阪の豊臣と、妹のお江がいる徳川の対立がいつそう激しさを増していきます。

お初は豊臣と徳川の仲介役として奔走し、大坂冬の陣では和議の交渉を取りまとめますが、夏の陣で豊臣はついに滅亡し、姉のお茶々は自害。最後まで交渉にあたったお初が大坂城を出

たのは、落城の当日でした。お初は城を出てからも豊臣方の侍女たちを収容し、家康に侍女たちの命乞いをしたといひます。さらにお茶々の次男豊臣秀頼の妻になっていた千姫（お江と秀忠の娘）と、秀頼の遺児である奈阿姫の助命にも力を注ぎました。晩年、お初が夫の菩提を弔うために建立した常高寺（小浜市小浜浅間）に創建の由来書が残っており、その中にある大坂の陣に関する一節に、お初の複雑な感情が見て取れます。

和睦偽謀之事を語りて、半ば恨み、半ば欣ぶ。（常高寺開基伝）

《伊藤一樹著『常高院と京極の女達』より》

お初が命がけで奔走した和睦は、徳川の策略であったと語り、そうした時代や徳川を恨みながらも、これで良かったのかもしれないと、ようやく訪れた平和を喜んでいと記されています。半ば恨み、半ば欣ぶという言葉からは、お初の胸の奥にある空しさや悲しみも感じられます。

寛永10（1633）年、お初は京極家の江戸屋敷で亡くなり、遺骸は遺言により小浜に運ばれ、常高寺で荼毘にふされました。常高寺には常高院（お初）の墓所をはじめ、書院の壁画や常高院の肖像画、自筆の手紙などが残り、貴重な文化財として保管されています。

※側室…高貴な人物の妾。①正室（正式な妻）。

※和議…関係を修復するための相談。

check for お初



『常高院殿』小浜市立図書館

伊藤一樹編『常高院殿三百五十年忌記念誌』若狭史学会

小和田哲男編著『戦国の女性たち』河出書房新社

『戦国大名浅井氏と北近江』長浜城歴史博物館

伊藤一樹編『常高院と京極の女達』後瀬書房

皆川博子『二人阿国』新潮社

福田千鶴『淀殿』ミネルヴァ書房

坂本優二『江 浅井三姉妹の生涯と戦国』河出書房新社

楠戸義昭『お江』静山社

『これき人物シリーズ2 ふくいの先人たち 近世』福井県立こども歴史文化館



初は叔母であり、夫の母でもある京極マリアの「マリア」という名は、キリスト教の洗礼を受けてからのクリスチャンネームです。マリアは、お初にキリスト教の教えを説いて入信を勧め、慶長6（1601）年頃、お初は洗礼を受けました。高次もまた続いて入信しています。